能代市文化財調査報告書第14集

国史跡檜山安東氏城館跡

檜山城跡Ⅵ

― 令和３年度第６次発掘調査報告書 ―

2022.3
能代市教育委員会

檜山城跡Ⅵ

ひやまじょうあと

― 令和３年度第６次発掘調査報告書 ―

2022.3

能代市教育委員会

1 調査区航空写真（上がほぼ北北西）

2 調査区全景（北→）

巻頭カラー２

１　ＴＰ１古寺出土石碑（表）

２　ＴＰ１古寺出土石碑（裏）

序

本書は、令和３年度に実施した檜山城跡の第６次調査の成果をまとめたものです。
昨年度同様、新型コロナウイルスが広がりをみせる中での調査となりました。見学者の方々は少ないようでしたが、山城の中では密にならずに心地よい時間を過ごすことができています。檜山地区ではクマ対策も行っており、茶園地区での刈払いなども実施されました。

檜山城跡は、昭和５５年に大館跡、茶臼館跡とともに、檜山安東氏城館跡として国史跡に指定されました。平成２８年度から国庫補助事業による発掘調査を行い、令和３年度は第６次調査を実施しました。調査の結果、通称「本丸」から、建物の可能性のある柱穴群などが検出されました。まだどのような建物であったか判断するのに十分とは言えませんが、城主の居住空間であった可能性を示す成果となりました。遺物は１５世紀末から１７世紀初頭を中心に、室町時代中頃から江戸時代に属する陶磁器が出土したほか、金属製品、製鉄関連遺物などが見つかっております。また古寺地区では宗教的空間であったことを示す梵字が陰刻された石碑もみつかりました。

本報告書はその調査結果をまとめたものであり、文化財保護のため、中世城館研究のために広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、文化庁文化財第二課ならびに史跡檜山安東氏城館跡調査整備委員会をはじめ、関係機関の皆様には、移動がままならない中でも十分なご指導、ご助言を賜りましたことに心から感謝申し上げます。

令和４年３月

能代市教育委員会
教育長　高　橋　誠　也

例　言

１　本報告書は、令和３年度に能代市教育委員会が調査を実施した檜山城跡の発掘調査報告書である。当事業は国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付を受けて実施した。

２　本報告書の執筆は能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課文化財保護室主席主査播摩芳紀が担当した。ただし、第４章については株式会社パレオ・ラボに委託した放射性炭素年代測定の報告書を編集し掲載した。

３　調査は文化庁及び秋田県教育委員会の指導を得て、能代市教育委員会が実施した。

４　調査及び本報告書の刊行にあたって次の方々からご指導・ご教示を賜った。（五十音順、敬称略）

赤澤徳明　秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室　飯村　均　石川美咲　磯村　亨　伊藤直子
宇田川浩一　近江俊秀　乙戸　崇　利部　修　木戸雅寿　工藤清泰　小山美紀　髙橋　学
中村隼人　檜山地域まちづくり協議会　文化庁　水澤幸一　八重樫忠郎　山口博之　山口義伸
吉川耕太郎

５　本調査に関する全ての資料は能代市教育委員会が保管している。

凡　例

１　遺構実測図等に付した方位は座標北である。

２　本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

３　土層注記は基本層序にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。

４　遺構・遺物には以下の略記号を使用した。

ＳＤ 堀切・溝状遺構　ＳＫ 土坑　ＳＫＩ 竪穴状遺構　ＳＫＰ 柱穴様ピット　ＳＮ 焼土遺構
ＳＸ 性格不明遺構　ＲＰ 土器・陶磁器　ＲＭ 金属関連遺物　Ｓ 礫　Ｒ 根

目　次

巻頭カラー
序
例言・凡例・目次
第１章　檜山城跡の概要・・・・・・・・１
　第１節　檜山城跡の立地・・・・・・１
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・２
第２章　調査の概要・・・・・・・・・・６
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・６
　第２節　調査要項・・・・・・・・・・６
　第３節　調査の目的・・・・・・・・・７
　第４節　調査の経過・・・・・・・・・７
　第５節　調査の方法・・・・・・・・・８
第３章　調査の記録・・・・・・・・・・９
　第１節　検出遺構と出土遺物・・・・９
　第２節　堆積状況確認のための試掘調査・・２１
第４章　放射性炭素年代測定・・・・３５
第５章　まとめ・・・・・・・・・・・３９
図版
抄録

第１章　檜山城跡の概要

第１節　檜山城跡の立地

檜山城跡の所在する能代市は、日本海に面し、米代川河口部に港をもち、下流域に開けた能代平野に都市域が広がり、河川流域に集落が点在する。檜山城跡は能代平野に接して檜山川の発する丘陵部に位置する。現在の檜山集落の裏山のようなかたちで見下ろす霧山にあったのが檜山城で、霧山城とも呼ばれていた。現在公園となっている部分が古城（ふるしろ）と呼ばれる場所にあたる。

米代川河口からは約12km内陸に位置し、標高は最高所の将軍山が約165m、古城地区の通称「本丸」が約146mほどである。地質は女川層の未固結を含む軟質の泥岩が基盤層として広く確認されているほか、古城地区には約20万年前の海成層である石倉山層が確認でき、更にその上に15万年前に形成された古砂丘が堆積している場所も見られる。石倉山層は図３の地質図に拠れば、沢を挟んだ北側尾根上の中館と呼ばれる周辺にも分布している。また、将軍山地区の女川層の上層にはシルト質粘土の堆積も確認できる。なお、未固結泥岩のことを地元ではアマジャクと呼んでおり、本報告書では土層注記等の表記に用いた箇所もある。

図１　遺跡位置図

檜山城跡を中心として地理的特徴をみてみると、史跡指定されている丘陵の北側裾野を檜山川が西流し、その対岸、檜山城跡の北東方向に、檜山城を築城したとされる安東忠季の菩提寺国清寺の跡があり、その東の丘陵に安東愛季の再興した八幡神社が現存する。

西裾側は現在の檜山の町並みや、近世多賀谷氏の居館のあった茶臼山があり、その西を近世絵図にむじりき川として描かれる小川が流れる。これらを挟んだ対岸の丘陵は茶臼館跡であり、一連の檜山城下町を形成していたと見られる。東側には沢が入り込んで城を区画し、南側も急峻な沢地形で山城の要害的機能を生み出している。一方で、南東側には尾根上を通って三種町岩川方面へと抜ける山道がある。白坂道と呼ばれるこの道は、指定地内では城内道から続いており造成の痕跡を残している。当該方面は城の防御機能としては地形が緩やかであるため、大堀切がつくられ、城を画している。

第２節　歴史的環境

檜山川流域とその周辺には旧石器時代から近世までの遺跡が存在する。檜山城の使用された中世に属する遺跡は１９遺跡あり、安東氏に関わる伝承を持つ遺跡も含まれる。

檜山城が築城された年代を、近世史料である『新羅之記録』の記述を元に明応４年（１４９５年）とするのが通説であるが、同時代史料からは、檜山城や檜山集落の存在は現在のところ確認できない。それ以前には、能代平野周辺が元慶２年（８７８年）に起きた住民蜂起の際の野代村の所在地であるとも考えられ、檜山城跡とともに史跡を構成する大館跡（１１）は、当時の律令国家側の拠点「野代営（のしろたむろ）」の擬定地ともされる。ところが能代市管内では９世紀後半の遺跡数は少なく、檜山周辺でも集落や鉄生産遺跡（３７、３８）、祭祀遺跡（３３）などの１０世紀の遺跡が多く見られる。なお、檜山川流域のほ場からは、９世紀に属する遺物も見つかっているが、表採であり、詳細は不明である。

その後、檜山地域でも15世紀までの須恵器系陶器は散見されるが、羽州街道の前身となる街道や集落、城館の有無についての情報が少ないのが実状である。文献から15世紀末とされる檜山城の築城後には、安東氏代々の居城として、城下に町場が形成、あるいは拡大していったことが想定される。近世以前には街道がある程度整備され、檜山川を使った舟運も含めた交通体系が出来上がっていたと思われる。また、檜山地域で最も高い標高２１１ｍの幟山には戦国期安東愛季時代ころに城館があったとされる。

北方と関係の深い、地域色の濃い信仰として古四王神社の存在があり、現在は檜山神社となっている古四王神社が近世には茶臼館跡（１９）にあったことが江戸期の絵図から読み取れる。

このほかにも中世の痕跡として、国清寺跡（１６）や母体八幡神社、安東氏代々の菩提寺など縁の深い社寺が残るほか、檜山舞と名付けられた番楽が母体地区に伝わっている。近世の文献で檜山安東氏によって町立てされたとされる野代湊から米代川流域の鶴形地区まで、安東氏との結びつきが想定される日吉神社や、そのほか文化財や伝承などの分布が中世安東氏の存在を示している。

近世には羽後六郡に封された佐竹氏の置いた小場氏が檜山城を使用したと考えられ、次いで多賀谷氏が居城として入城したとされる。檜山城とは羽州街道を挟んだ西にある茶臼山に多賀谷氏の居館（１８）がつくられる一方で、檜山城は元和６年（１６２０年）に破却された。米代川河口の野代湊は佐竹氏によって一層整備され、秋田湊と並ぶ重要な湊として使用された。檜山地区でも檜山の町を通る羽州街道や一里塚（8）、街道の松並木などが整備され、今もその痕跡を見ることができる。

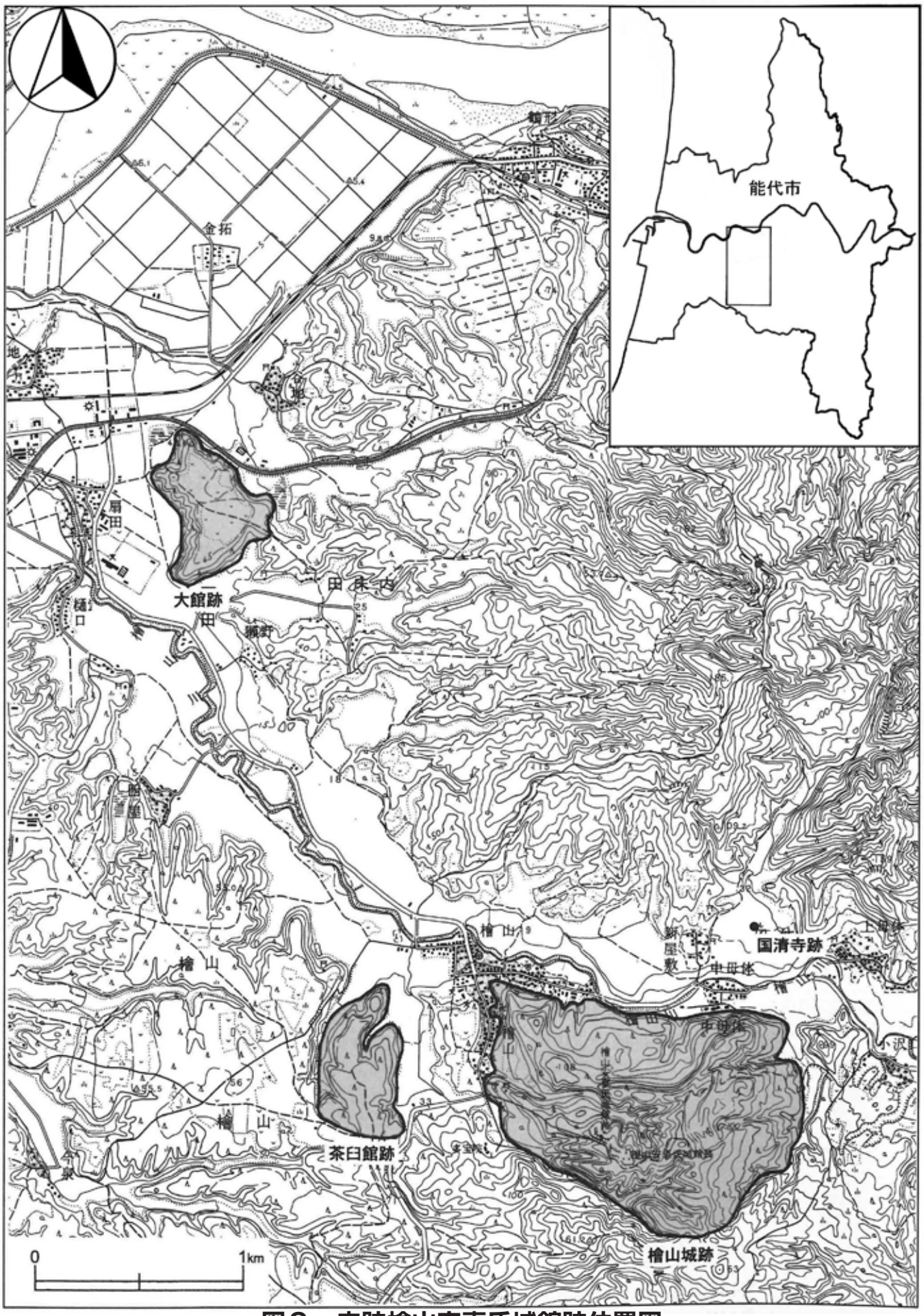
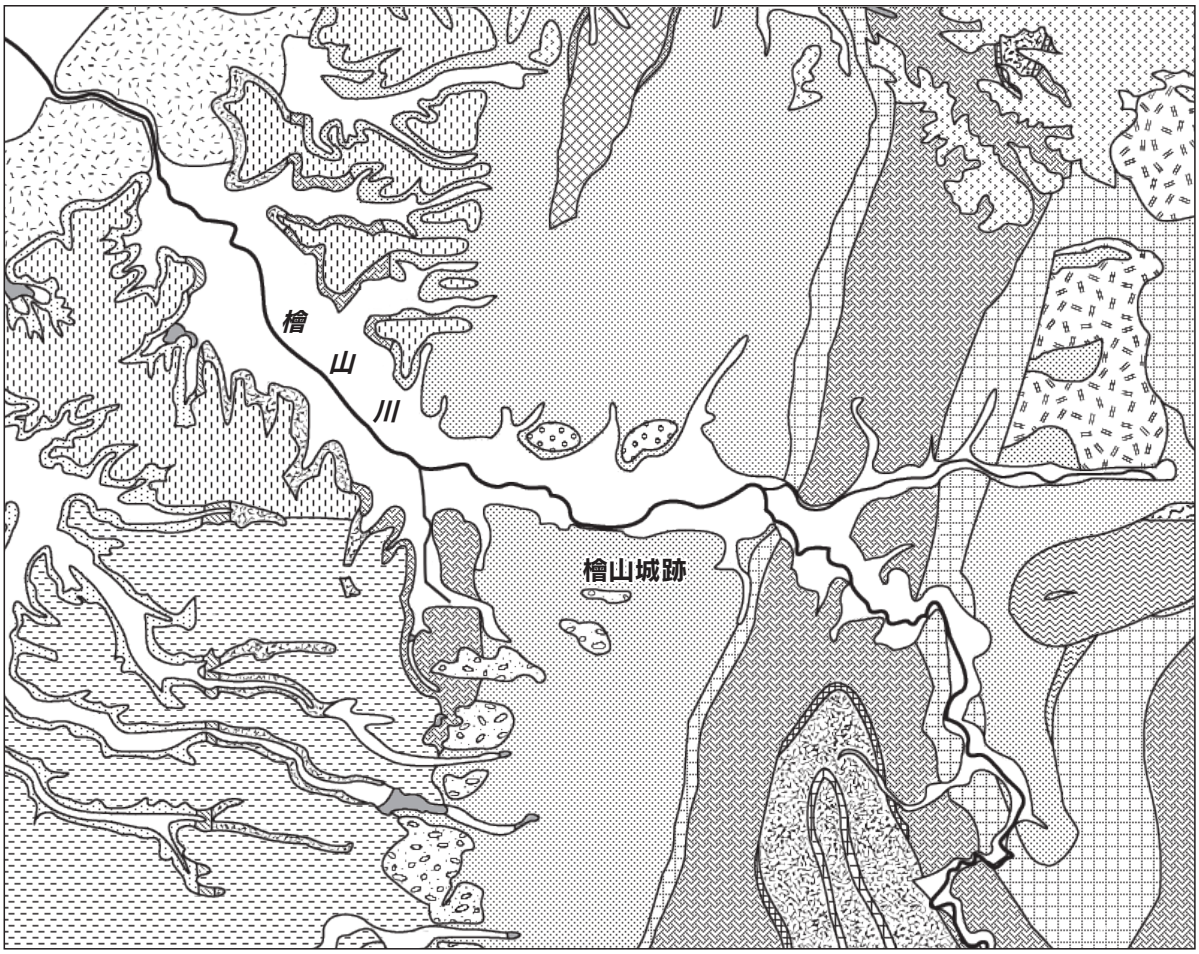


図２　史跡檜山安東氏城館跡位置図



沖積層

毛馬内段丘堆積物

低位Ｉ段丘堆積物

潟西層
砂及び礫（泥及び泥炭伴う）

潟西層
礫・砂及び泥（亜炭を伴う）

高位Ｉ段丘堆積物

石倉山層

中沢層

笹岡層

天徳寺層
シルト岩（砂岩・礫岩・酸性凝灰岩及び砂質凝灰岩を伴う）

天徳寺層
酸性凝灰岩及び砂質凝灰岩

船川層上部七座凝灰岩部層

船川層主部

船川層下部七座凝灰岩部層

茂谷山流紋岩

素波里安山岩

素波里安山岩
角閃石デイサイト溶岩

素波里安山岩
紫蘇輝石普通輝石角閃石安山岩溶岩

女川層

早口川層一ノ又沢玄武岩部層

早口川層主部

池沼

（『能代市史　特別編　自然』付図をトレースして改変）

図３　檜山城跡周辺地質図

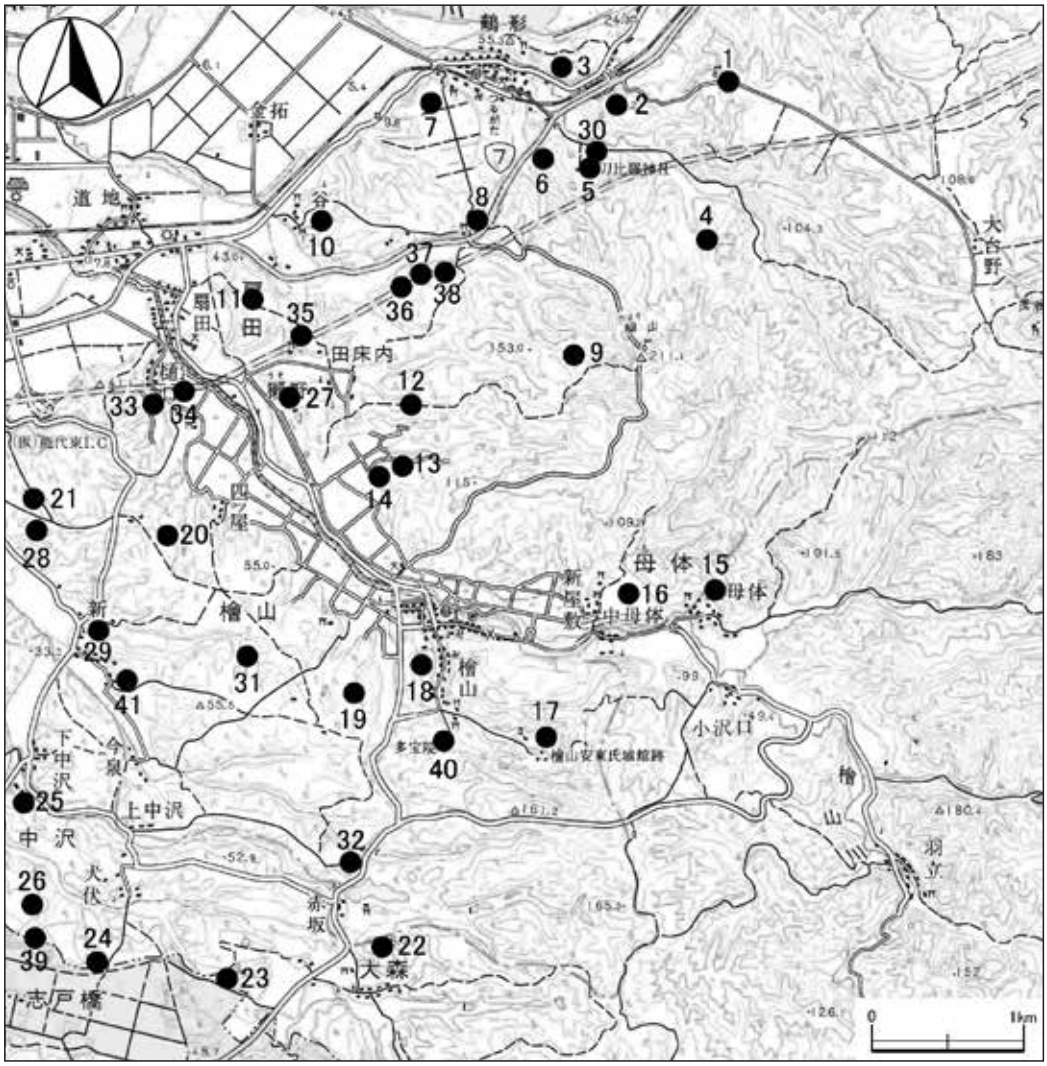


図４　周辺遺跡分布図

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代
1	2-92	鶴形大台野遺跡	能代市字大台野	縄文	21	2-114	苗代沢遺跡	能代市鰄渕字苗代沢	古代、中世
2	2-94	赤館跡	能代市字外堤	中世	22	2-115	大森館跡	能代市大森字大森	中世
3	2-95	比丘尼館跡	能代市字外堤	中世	23	2-116	大森大台野遺跡	能代市大森字大台野	縄文
4	2-96	山神社前遺跡	能代市山神社前	縄文、古代	24	2-117	中沢大台野遺跡	能代市大森字大台野	縄文
5	2-97	鶴形窯跡	能代市字山崎	近世	25	2-118	古館跡	能代市中沢字蟻古舘	古代、中世
6	2-98	大館跡	能代市字戸草沢	古代、中世	26	2-126	蟻ノ台Ⅷ遺跡	能代市中沢字蟻の台	縄文
7	2-99	上ノ山遺跡	能代市字上の山台	縄文、古代 中世、近世	27	2-169	獺野遺跡	能代市扇田字獺野	中世
					28	2-171	新田沢遺跡	能代市桧山字新田沢	縄文
8	2-100	鴨巣一里塚	能代市字上の山、字谷地上	近世	29	2-172	中瀬戸沢遺跡	能代市桧山字中瀬戸沢	古代
9	2-101	八重掘館跡	能代市字山神社前	古代、中世	30	2-173	山崎遺跡	能代市字山崎	古代
10	2-102	谷地館跡	能代市字田中谷地	古代、中世	31	2-180	上平張遺跡	能代市桧山字上平張	中世
11	2-103	大館跡	能代市田床内字大館	古代、中世	32	2-195	瓶長根遺跡	能代市中沢字瓶長根	縄文
12	2-104	二夕又遺跡	能代市田床内字二夕又	古代	33	2-199	樋口遺跡	能代市扇田字樋口	古代
13	2-105	三岳館跡	能代市桧山字上館	縄文、古代 中世	34	2-200	岩ノ目遺跡	能代市扇田字岩ノ目	縄文、古代
					35	2-201	縄手下遺跡	能代市田床内字縄手下	旧石器、縄文、古代
14	2-106	三岳遺跡	能代市桧山字上館	縄文					
15	2-107	上母体遺跡	能代市母体字上母体家の下	縄文	36	2-202	鴨巣館跡	能代市田床内字鴨巣	古代、中世 近世
16	2-108	国清寺跡	能代市桧山字蟹沢	中世					
17	2-109	檜山城跡	能代市桧山字古城	中世、近世	37	2-203	鴨巣Ⅰ遺跡	能代市字鴨巣	古代
18	2-110	多賀谷居館跡	能代市桧山字霧山下	縄文、古代 中世、近世	38	2-204	鴨巣Ⅱ遺跡	能代市字鴨巣	縄文、平安
					39	2-206	割道Ⅲ遺跡	能代市中沢字大台野	縄文
19	2-111	茶臼館跡	能代市桧山字茶臼館	古代、中世	40	2-207	小間木遺跡	能代市桧山字小間木	中世、近世
20	2-113	四ツ屋台遺跡	能代市扇田字四ツ屋台	古代	41	2-210	堤下遺跡	能代市桧山字堤下	古代

表１　周辺遺跡一覧

【参考文献】
秋田県教育委員会　2006『樋口遺跡』秋田県文化財調査報告書第411集
2007『鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡･鴨巣Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第422集
2011『秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ―檜山安東氏城館跡（大館跡）調査―』
大沢穠、鯨岡明、粟田泰夫、高安泰助、平山次郎　1985『森岳地域の地質』地域地質研究報告　地質調査所
大沢穠、池辺穣、平山次郎、粟田泰夫、高安泰助　1984『能代地域の地質』地域地質研究報告　地質調査所
工藤英美　1987「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』４号
1992「能代平野の成り立ち（その一)」『年報　能代市史研究』２号
能代市　1994『能代市史　資料編　考古』
2000『能代市史　特別編　自然』
2008『能代市史　通史編Ⅰ原始・古代・中世』
2018『能代市史　通史編Ⅱ近世』
能代市教育委員会　1978『大館遺跡発掘調査報告書』
『享保十三年　檜山一円御絵図』
『天保二年檜山絵図』

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

能代市教育委員会では、檜山城跡が檜山安東氏城館跡として昭和５５年に史跡に指定された後、除草などの保存管理を行ってきた。平成１０年からの縄張り調査を経て、平成１８年には能代市と二ツ井町が合併し、平成２８年度に史跡檜山安東氏城館跡環境整備計画が策定された。平成２９年度から整備を行っており、そのための情報を得るために発掘調査が平成２８年度から行われている。今年度は６年目の調査となる。

発掘調査は、整備のための情報を得ることを目的として、補助事業を受けて実施した。調査主体は能代市教育委員会である。

第２節　調査要項

遺　跡　名　檜山城跡：史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡 大館跡 茶臼館跡）

所　在　地　秋田県能代市檜山字古城地内ほか

調 査 期 間　令和３年５月13日～11月８日

調 査 面 積　約118㎡

調 査 担 当　播　摩　芳　紀（能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課文化財保護室主席主査）

工　藤　　晃（能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課文化財保護室主査）

石　山　龍　二（能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課文化財保護室主事）

武　田　　航（会計年度任用職員）

事　務　局　能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課

課　　長　田　口　俊　成

文化財保護室

室　　長　山　崎　和　夫

副 室 長　工　藤　英　子

会計年度任用職員　市　川　志穂子
会計年度任用職員　越前谷　美和子
会計年度任用職員　菊　池　夕　子

指 導 機 関　文化庁文化財第二課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所、秋田県埋蔵文化財センター、史跡檜山安東氏城館跡調査整備委員会

調査作業員　秋林俊一、伊藤和喜、小林優麗、中山隆寿、七尾高明、平川政光、藤田主計、丸山勇矢、三浦鏡吾

第３節　調査の目的

本調査は、史跡檜山安東氏城館跡環境整備計画に示した発掘調査の一環として実施した。調査区は古城地区の通　称「本丸」で、城の中心部であったと想定される地区である。「本丸」では、土の堆積、建物の有無や規模を確認するためにトレンチを設定した。調査区はＨＥとし、１～１０の番号を付した。トレンチの拡張によりつながったＨＥ３、４、８についてはそれぞれ１、２、５に併合されたため番号は存在しない。

これらと同時に、倒木によるき損箇所の造成状況、遺構の有無を確認することを目的とした、現状変更対応のための調査を、古寺から中館まで12カ所で行い、調査区名をそれぞれＴＰ１～１２とした。なお、ＴＰ１では調査区を北、南に、ＴＰ３、４はＡ、Ｂに分けて調査した。

第４節　調査の経過

発掘調査は、令和３年５月１３日から断続的に１１月８日の期間で実施した。現地での任意の基準点の測量も並行して行った。最初に通称「本丸」調査区、き損対応のＴＰ６，７から調査を開始したＴＰ１～１２のき損対応調査は順次、臨機応変に調査しつつ、通称「本丸」と同時に調査を進めた。通称「本丸」調査区はトレンチをＨＥ１から付番し、順番にＨＥ１０までを設定した。調査対象地北側から掘り下げを開始し、曲輪南側へ調査区を広げていった。堆積状況を確認しながら、精査を行い、必要に応じてサブトレンチを設定し、検出遺構、遺物出土位置、堆積状況などの記録を作成した。記録はトータルステーションによる遺構実測システムと手実測によった。

５月１７日に能代東中学校１年生３３名が発掘調査体験を通称「本丸」で行った。６月１日には調査用道具置き場と現場作業員休憩のためのコンテナハウスを設置した。６月８日、７月４日、同月２９日、１０月５日、同月12日に調査整備委員・助言者による現地指導を受けた。

６月末から８月末まで、赤ハゲⅠ、Ⅱ遺跡の緊急発掘調査を本史跡調査担当者２名が対応したため、調査は２人態勢となった。８月５日には秋田県埋蔵文化財センターの指導を受けた。８月１９日能代高校インターンシップ１名、２６、２７日に秋田大学のインターンシップ１名を受け入れた。８月２２日には見学会を行い２０名の参加があった。９月１日に調査整備委員会の現地指導を受け、ＨＥ５、７を拡張した。１１月４日、同月１８日には文化庁の現地指導を受けた。

９月２１日、ＴＰの埋め戻しを順次開始した。ＴＰ３ではサブトレンチを新たに設置した。同月２４

日ＨＥ１０を設定した。５月１９日から断続的に行った古寺地区ＴＰ１の調査は１０月１９日に埋め戻しを行い同月２１日にき損対応調査を終了した。１０月１３日能代市子ども館千羽館長のご協力を得てドローンによる空撮を行った。通称「本丸」調査区では１０月２１日より埋め戻しを開始した。１０月３０日コンテナハウスを撤去完了した。今年度の６０日間の調査は１１月８日に終了した。

第５節　調査の方法

発掘調査は、第５次調査で遺構の分布の密であった曲輪中央西寄りを中心に調査区を設定し掘り下げた。土の堆積状況や遺構の造成状況を確認しつつ遺構の精査を行った。調査の記録は図面と写真によった。設定した調査区は国家座標を持つ杭を基準にトータルステーションで測量し、その位置を基準として平面実測を行った。平面実測、遺物の出土位置実測には遺構実測システムを用い、断面や一部平面実測には手実測で対応した。写真撮影にはデジタル一眼レフカメラを用い、一部はコンパクトデジタルカメラも併用した。

基本層序は以下のとおりである。地山の基本土層は調査区全体にみられた複数の地山から作成した。Ⅳ層は漸移層で、地山によって主体土が変化するが調査区全体で１層として認識した。後世の削平を受けていないと判断した層をⅢ層としたが、調査区内ではわずかに残るのみであった。遺物包含層と捉えられる層は今年度調査区では確認できなかった。

Ⅰ　10YR4/1 褐灰色土 表土 しまりあり 粘性弱

Ⅱ　10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂質シルト しまりあり 粘性弱 地山ﾌﾞﾛｯｸ少量 炭化物微量

Ⅲ　10YR5/3 にぶい黄褐色土 シルト 地山砂ﾌﾞﾛｯｸ

Ⅳ　10YR5/3～7/4 にぶい黄褐～にぶい黄橙色土 シルト～砂 しまりあり 粘性やや弱 地山砂

Ⅴ　10YR5/4～7/6 にぶい黄褐～明黄褐色土 砂 地山

第３章　調査の記録

第１節　検出遺構と出土遺物

第６次調査は、通称「本丸」を調査区に設定して実施した。曲輪中央西寄りに、遺構の有無と、土の堆積状況の把握を目指して設定した。

トレンチは初めにＨＥ１から４までを第５次調査で遺構の分布の濃かった地区を中心に設定し、順次広げていった。設定した順に付番しＨＥ１０までを設定した。トレンチをつなげることで若い番号に吸収したため､ＨＥ３、４、８は欠番となった。一部は５次調査と重なり、全体を明らかにするために再度平面を確認、精査した。虎口と考えられる東側括れ部分の斜面にトレンチを予定していたが、平場の遺構の広がりを確認するためにトレンチを拡張するなど、平面調査を優先した。

調査区の標高は、約146.2～146.7ｍほどである。

挿図土層断面図は地山まで掘削した箇所を実線で、地山に至らない部分は破線で表現した。掘り込み面、生活面には太線を用いて表現した。

１　検出遺構

検出遺構は５次調査で検出した竪穴状遺構１基を含め、土坑１基、溝跡１条、焼土遺構１基、柱穴様ピット125基、性格不明遺構１基である。そのほか曲輪の造成が確認された。柱穴様ピットは建物跡の可能性がある柱の並びが確認された。ＳＫＰ００２・００９・０２５は柱間６尺５寸で並んでおり、０３５・０４２・０４６・０７３（・０７６）・１２８はほぼ６尺で並び、４尺を空けて南には同様に柱穴が並ぶ。全体が把握できないため建物跡の検出数には含めず次年度以降の調査で規模を明らかにしていく。

時期は、出土遺物、遺構確認面から中世～近世初頭と考えられる。主に半さい等掘り下げた遺構について記述する。

５－ＳＫＩ０７竪穴状遺構

ＨＥ５・１０に位置する。漸移層中で検出した。東側の炭混じりのプランを同一遺構と捉えると、最大で長軸５ｍ40㎝を測る。北側に縁に粘土を貼ったような部分が見られる。土層は第５次調査ＨＣ３Ａトレンチの北壁を再度検討した。今年度調査の名称ではＨＥ１０ＢＢ’土層となる。６層に分けられた。３層が造成土、4’・5’層が炭化物範囲に由来する層、8’層がＳＫＩ０７、９層が東側プランの覆土となる。１０層は漸移層と考えられる。東側の炭混じりのプランを切っているが同一遺構の可能性がある。ＳＫＯ１・ＳＤＯ２・ＳＸＯ４・ＳＫＰ１３５・１３７・１３９・１４８～１５１・１６２・１６３に切られる。東側の炭混じりのプランが同一遺構だとすると１５５・１５６にも切られる。

ＳＫＯ１土坑

ＨＥ５に位置する。第５次調査ＳＫＩ０７を切るプランとして検出した。長軸約１ｍ44㎝を測る。ＳＫＰ１４８～１５０に切られる。確認面で白磁１点が出土した。

ＳＤＯ２溝状遺構

ＨＥ５・１０に位置する。第５次調査でＳＫＩ０７の一部として検出しており、広く面で調査したところ東西に延びる溝状のプランとして確認した。幅約40㎝を測り、全長３ｍ90㎝と推定される。ＳＫＩＯ

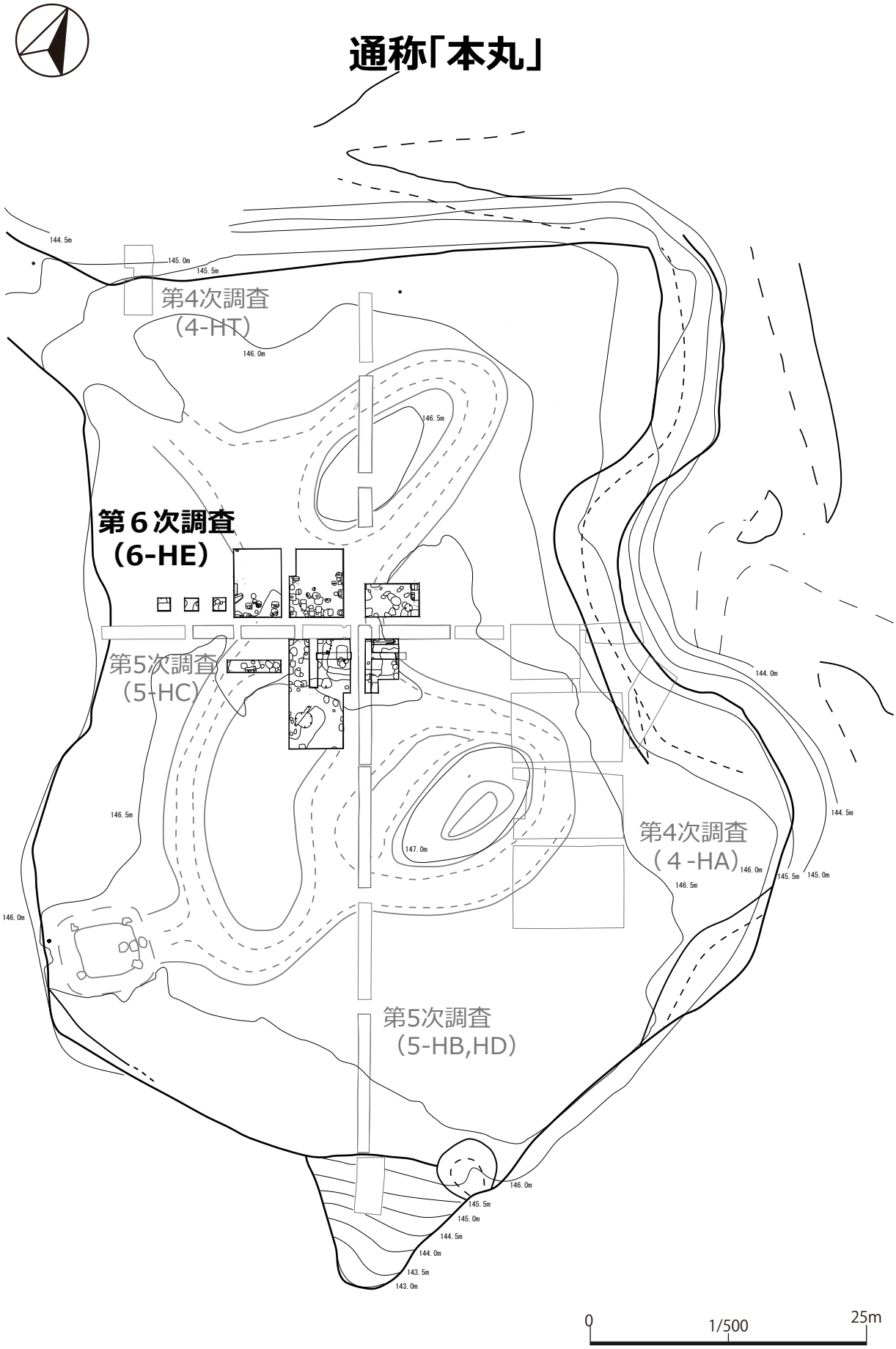

通称「本丸」
第4次調査
（4-HT）
第６次調査
（6-HE）
第5次調査
（5-HC）
第4次調査
（４-HA）
第5次調査
（5-HB,HD）
144.5m
145.0m
145.5m
146.0m
146.5m
147.0m
144.0m
143.5m
143.0m
0
1/500
25m

図５　調査区全体図

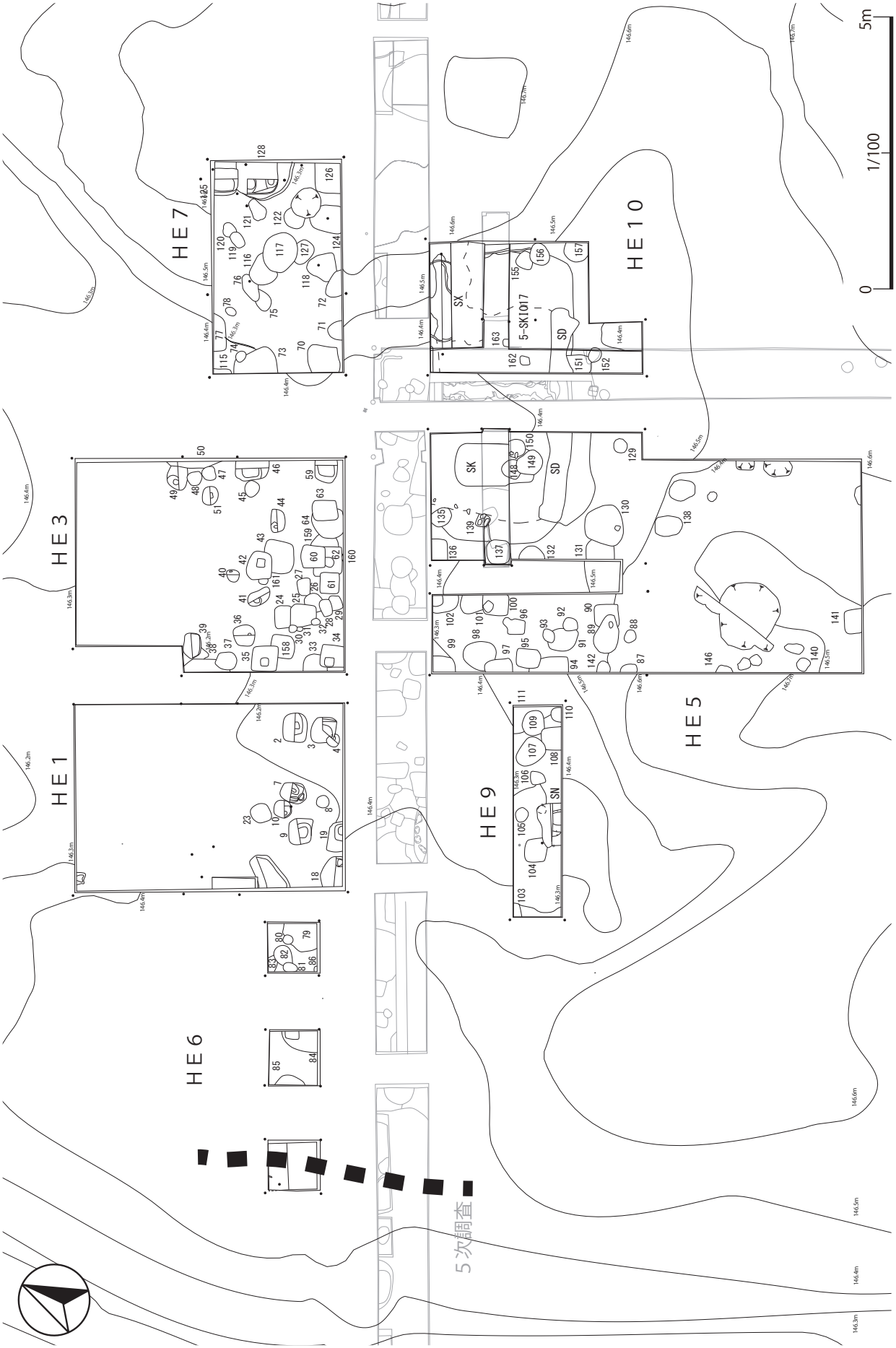
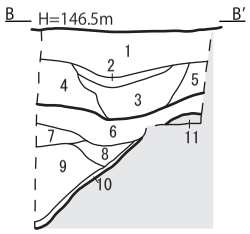


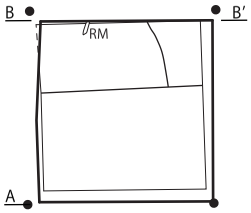
図６　遺構配置図ＨＥ１～１０

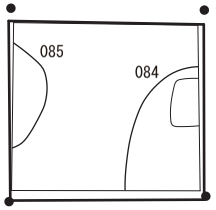
ＨＥ１ＡＡ′土層、６Ａ・Ｂ・ＣＡＡ′土層
1(Ⅰ)10YR3/3暗褐色土　ｼﾙﾄ　もろい　草根多
2(Ⅱ)10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　炭化物微量
2′　10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　小礫5～10mm微量　炭化物～5mm微量
3(Ⅲ)10YR5/3　ｼﾙﾄ　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ
4　10YR3/4暗褐色土　ｼﾙﾄ　地山ﾌﾞﾛｯｸ5～10mm微量混
4′　10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　しまりあり
5　10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　3層より若干暗い　しまりあり
6　10YR4/6褐色土　砂質～ｼﾙﾄ　しまりあり　漸移層
　上層由来と思われる10YR3/4がシミ状に混入
7(Ⅳ)10YR5/4にぶい黄褐色土　ｼﾙﾄ～砂質　10YR6/6地山砂ﾌﾞﾛｯｸまだら混入
8(Ⅴ)10YR5/4～7/6にぶい黄褐～明黄褐色土　地山砂

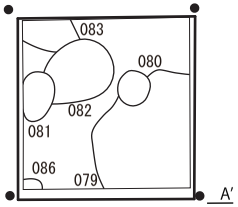
SKP079
(1) 10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ
(2) 10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　(1)層より若干明るい
SKP018
(1) 10YR4/2灰黄褐色土
SKP086
(1) 10YR3/4暗褐色土　ｼﾙﾄ　２層より若干暗い

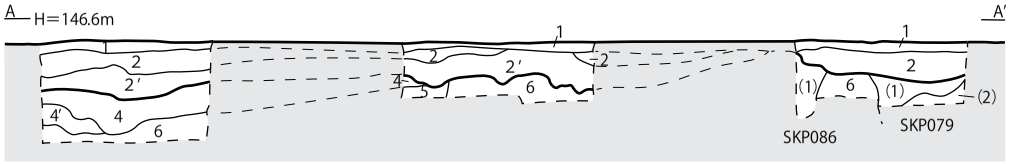
ＨＥ６ＣＢＢ′土層
1　10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性弱　炭化粒微量　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
2　10YR6/6 明黄褐色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性弱　炭化粒微量　10YR5/3 土中量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性やや弱　炭化粒微量　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ微量
　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
4　10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性弱　炭化粒微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
5　10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性弱　炭化粒微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
6　10YR4/2 灰黄褐色土　砂　ﾏｯﾄ　しまりややあり　粘性やや弱　炭化粒微量　砂ｼﾙﾄ粒微量
　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
7　10YR7/6 明黄褐色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性ややあり　10YR5/3 土少量
8　10YR6/4 にぶい黄橙色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性弱　上面で RM
9　10YR4/2 灰黄褐色土　ｼﾙﾄ　ﾏｯﾄ　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ微量　炭化粒極微量
　酸化粒微量
１０　10YR5/4 にぶい黄褐色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性やや弱　漸移層
１１　10YR7/4 にぶい黄橙色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性やや弱　～２cm礫１個　酸化粒微量

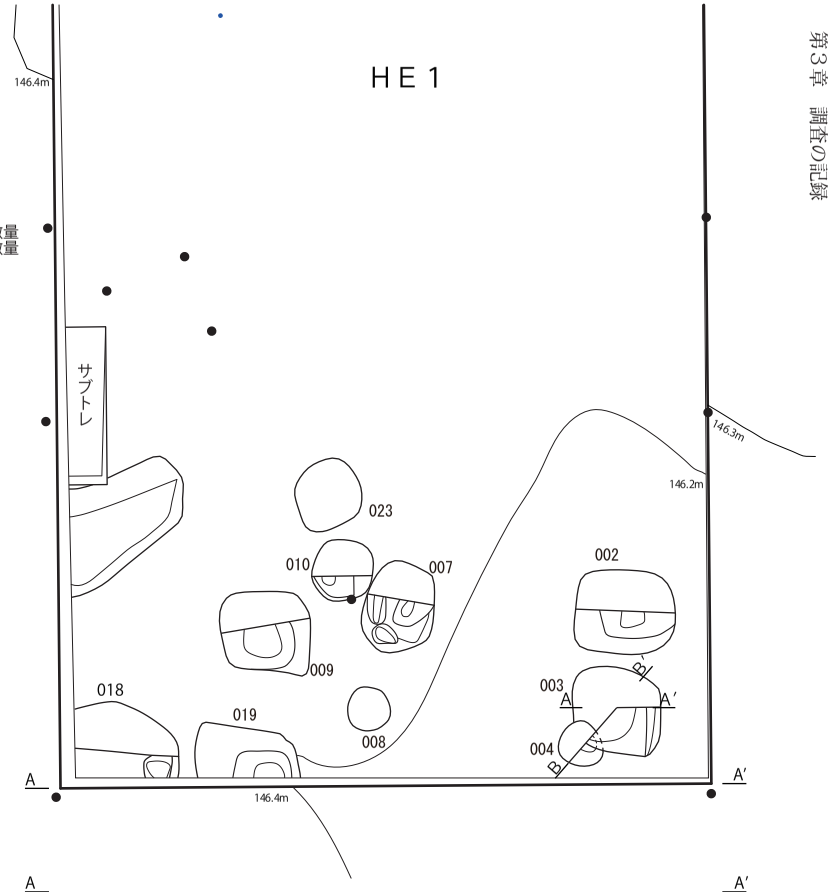


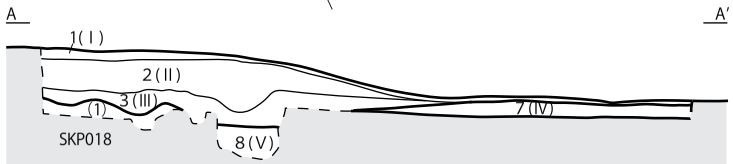










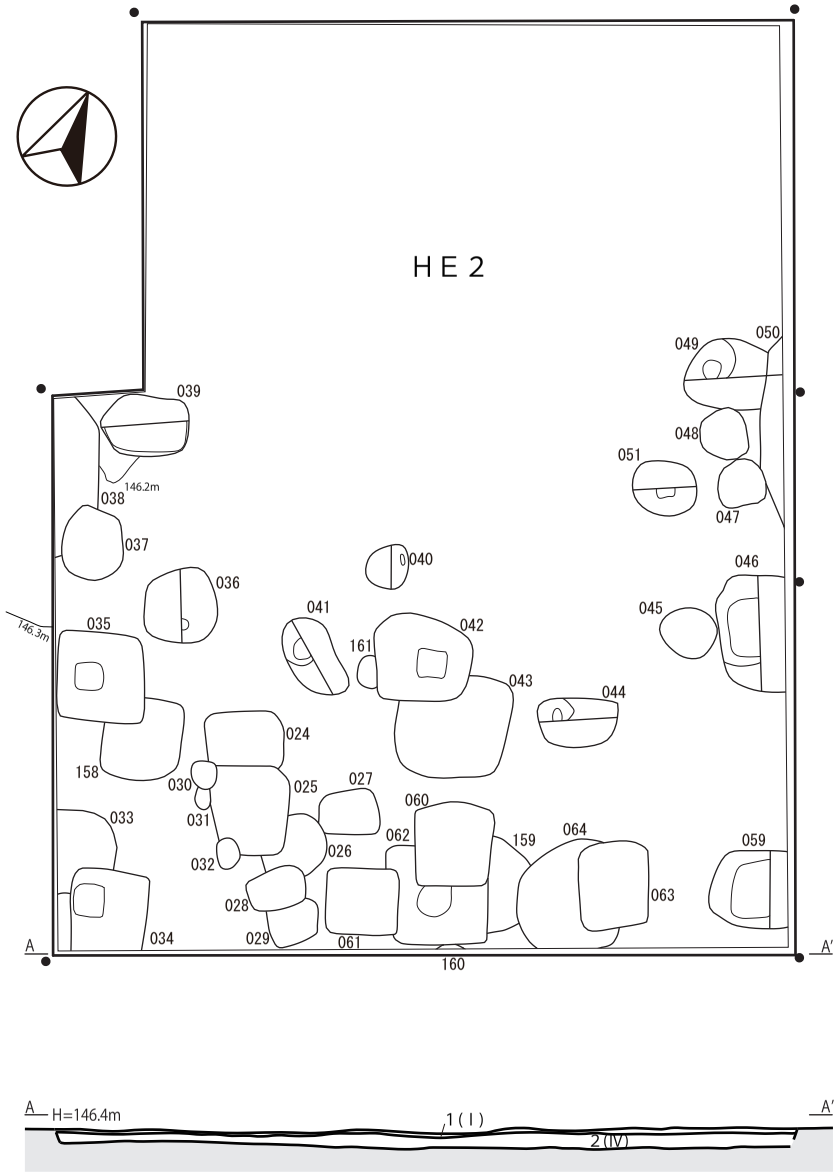


0　1/40　2m

図7　HE1・6A・B・C

ＨＥ２ＡＡ′土層
１(Ⅰ)10YR3/3暗褐色土　ｼﾙﾄ　もろい　草根多
２(Ⅳ)10YR4/6褐色土　ｼﾙﾄ～砂質　地山ﾌﾞﾛｯｸ10YR6/8との混土

ＨＥ７ＡＡ′土層
１(Ⅰ)10YR4/2 灰黄褐色土　ねっとり砂質　しまりあり　粘性弱
２　10YR4/4 褐色土　砂　しまりあり　粘性弱　盛土　公園造成土
３(Ⅱ)10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　炭化粒微量　～２㎜礫微量　～５㎜白石微量
４(Ⅳ)10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　砂質地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　遺構覆土



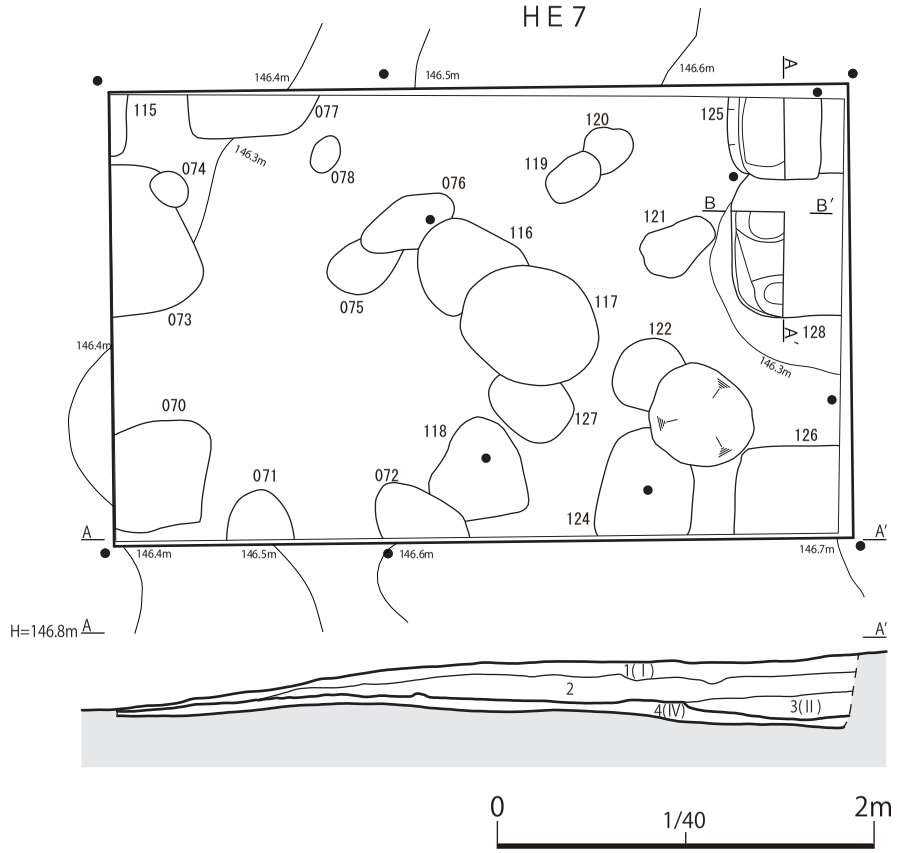


図８　ＨＥ２・７

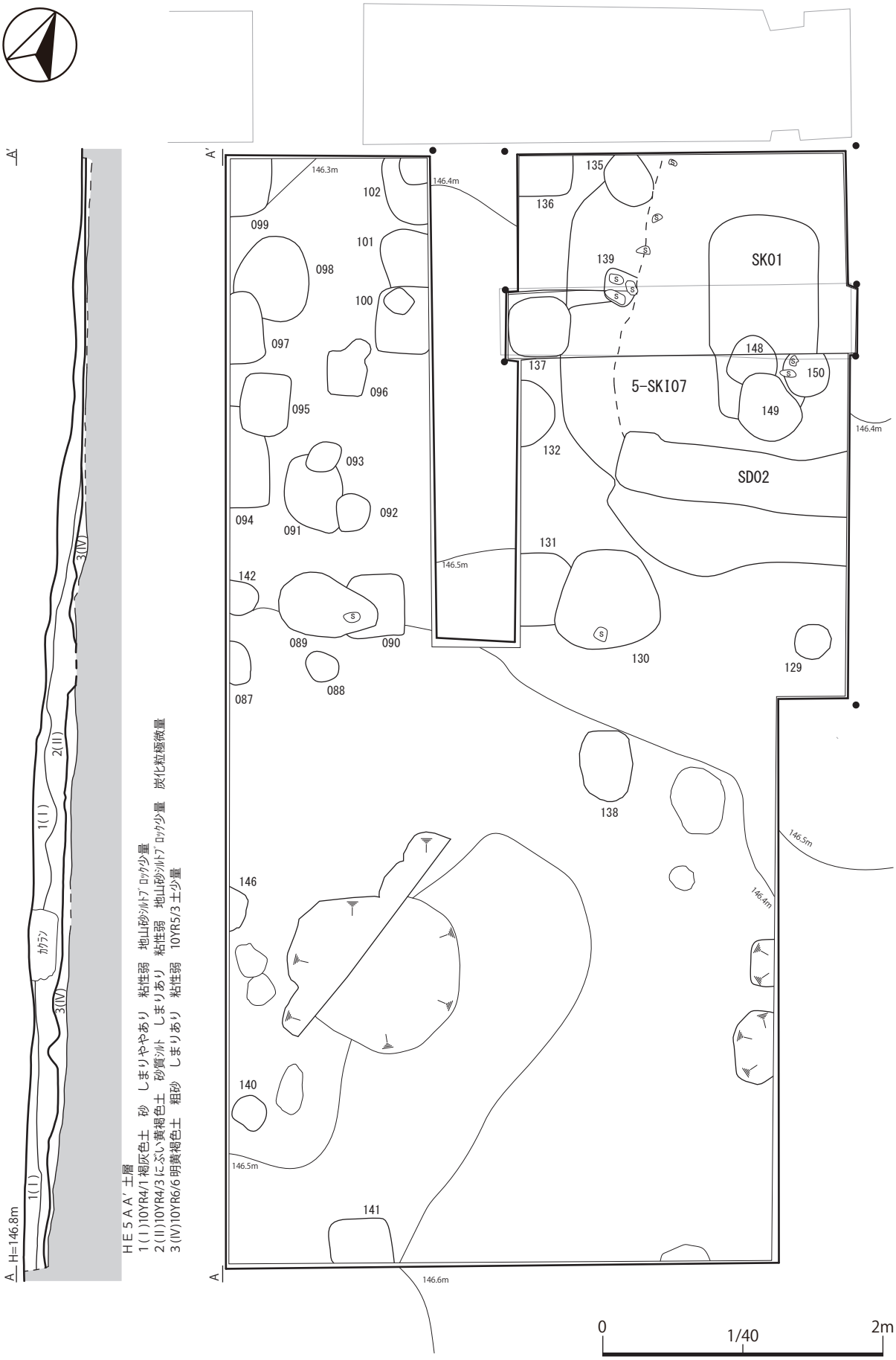

A'
A
H=146.8m
1(Ⅰ)
2(Ⅱ)
3(Ⅳ)
カクラン
ＨＥ５ＡＡ'土層
1(Ⅰ)10YR4/1 褐灰色土　砂　しまりややあり　粘性弱　地山砂ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少量
2(Ⅱ)10YR4/3 にぶい黄褐色土　砂質ｼﾙﾄ　しまりあり　粘性弱　地山砂ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ少量　炭化粒極微量
3(Ⅳ)10YR6/6 明黄褐色土　粗砂　しまりあり　粘性弱　10YR5/3 土少量
146.3m
146.4m
146.5m
146.6m
099
098
097
096
095
094
093
092
091
090
089
088
087
102
101
100
142
146
140
141
135
136
139
137
132
131
130
129
138
148
149
150
SK01
5-SKI07
SD02
0
1/40
2m

図9　ＨＥ５

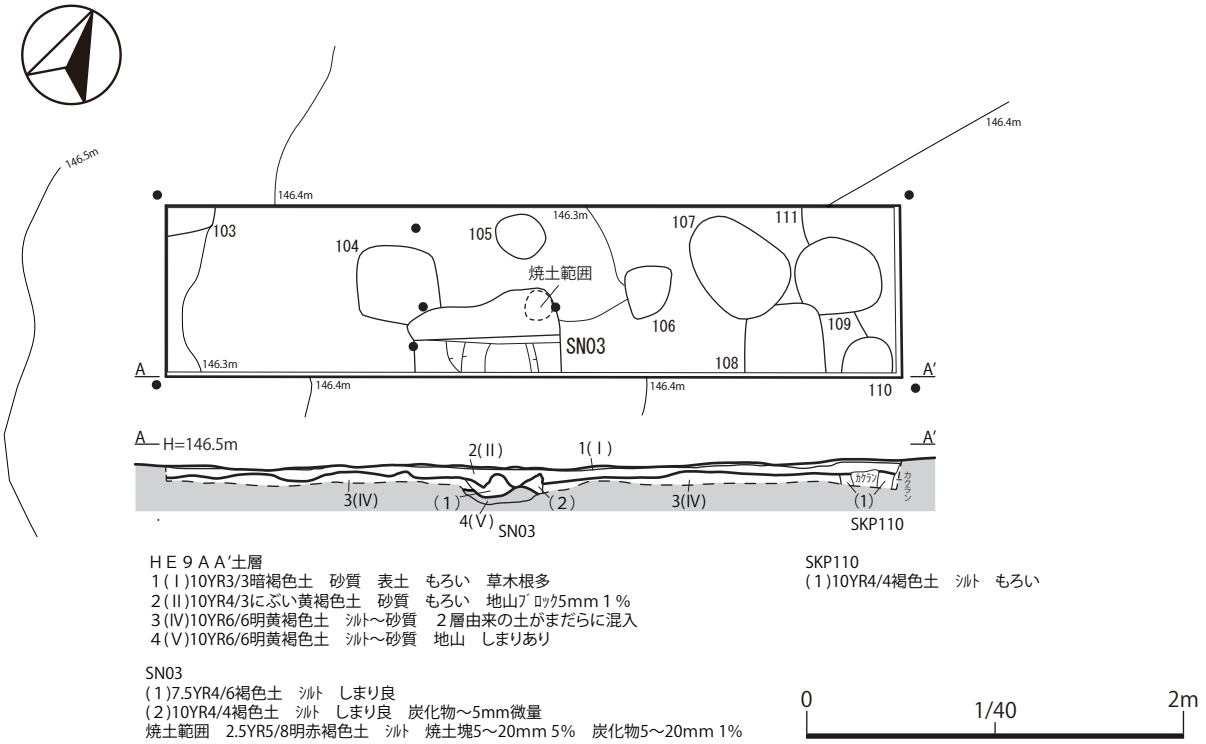


図１０　ＨＥ９

７を切る。

ＳＮＯ３焼土遺構

ＨＥ９に位置する。漸移層中で確認した。硬化面はみられない。焼成面と思われる範囲もわずかである。南壁土層では２層に分けられたほか、サブトレンチ内には掘り込みも確認できる。サブトレンチから釘１点が出土した。

ＳＸＯ４性格不明遺構

ＨＥ１０に位置する。第５次調査ＳＮＯ６と連続する。炭化物範囲の下から、焼土をわずかに、炭を多量に含む広がりとして検出した。東西に長軸１ｍ60㎝を測る。幅は歪だが30㎝前後を測る。深さは約14㎝である。ＨＥ１０ＡＡ’土層では１～３層が公園造成土と考えられ、その下が炭化物範囲を含む、第５次調査でＳＮＯ６と捉えた層と考えられる。本遺構の土層は４層に分けられた。２層が炭主体層となる。ＳＫＩＯ７を切る。

ＳＫＰＯＯ２柱穴様ピット

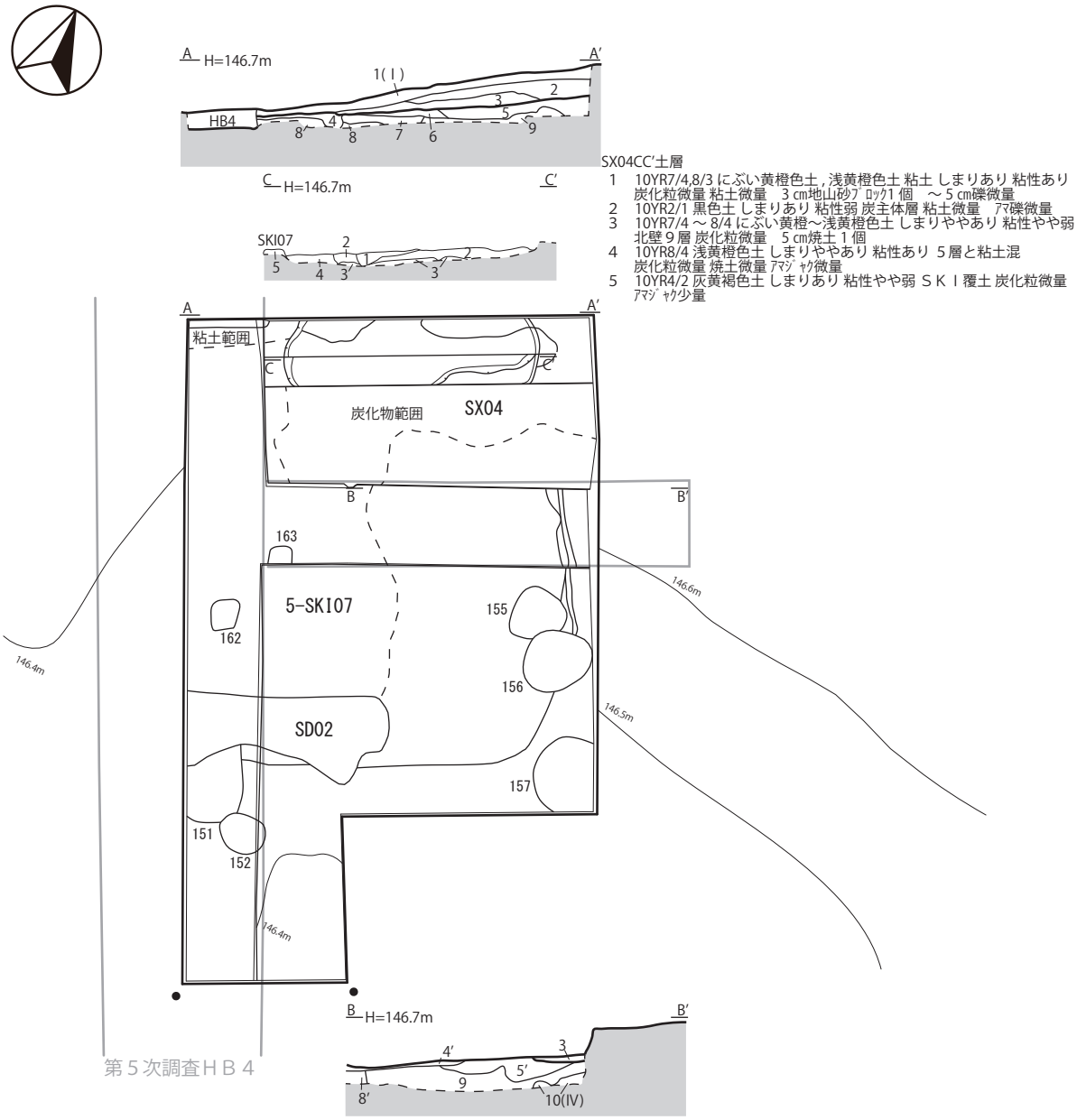
ＨＥ１に位置する。歪な隅丸方形を呈す。深さ60㎝、確認プランで径38㎝を測る。２層に分けられた。

ＳＫＰＯＯ３柱穴様ピット

ＨＥ１に位置する。歪な隅丸方形を呈す。深さ48㎝、確認プランで径45㎝を測る。３層に分けられた。ＳＫＰＯＯ４に切られる。

ＳＫＰＯＯ４柱穴様ピット

ＨＥ１に位置する。略円形を呈す。深さ24㎝、確認プランで径20㎝を測る。２層に分けられた。ＳＫＰＯＯ３を切る。



ＨＥ１０ＡＡ′･ＢＢ′ 土層
1(Ⅰ)10YR4/1 褐灰色土　砂　しまりあり　粘性弱
2　10YR4/4 褐色土　砂　しまりあり　粘性弱　３層土中量　炭化粒微量　造成土
3　10YR4/1 褐灰色土　砂　しまりややあり　粘性ややあり　２層土少量　炭化粒微量　造成土か
4　10YR4/3 にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性ややあり　炭化粒微量　～１㎝焼土微量　粘土ﾌﾞﾛｯｸ
4′　10YR4/2 灰黄褐色土　砂　しまりあり　粘性やや弱　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ微量　焼土微量
5　10YR4/1 ～ 3/1 褐灰～黒褐色土　砂　しまりあり　粘性やや弱　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ少量　炭化粒微量
5′　10YR4/2 灰黄褐色土　砂　しまりあり　粘性やや弱　地山砂ﾌﾞﾛｯｸ少量　炭化粒微量
6　10YR4/1 ～ 3/1 褐灰～黒褐色土　砂　しまりややあり　粘性やや弱　炭化粒微量　焼土微～少量　～２㎝粘土粒微～少量
7　10YR7/1 灰白色土　しまりややあり　粘性やや弱　炭主体層　～３㎝焼土少量
8　10YR8/3 浅黄橙色土　粘土主体層　しまりあり　粘性あり　粘土主体層　４層土少量　炭化粒微量
8′　10YR5/3 にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性やや弱　炭化粒微量　ｱﾏｼﾞｬｸ微量　粘土微量　ＳＫＩ覆土
9　10YR6/4 ～ 5/4 にぶい黄橙～にぶい黄褐色土　砂　しまりあり　粘性ややあり　炭化粒微量　焼土微量
１０(IV)10YR7/4 にぶい黄橙色土　砂　しまりあり　粘性やや弱　９層土微量　漸移層か

0　1/40　2m

図１１　ＨＥ１０

ＳＫＰ００９柱穴様ピット

ＨＥ１に位置する。歪な隅丸方形を呈す。深さ58㎝、確認プランで径26㎝を測る。７層に分けられた。３～５層は柱痕と考えられる。

ＳＫＰ１２５柱穴様ピット

ＨＥ７に位置する。漸移層中で確認した。隅丸方形を呈すと推測される。深さ64㎝、確認プランで径

50㎝を測る。９層に分けられた。２層が柱痕跡と考えられる。８層には根固めの可能性のあるしまりのある灰色の土が含まれる。ＳＫＰ１２８を切る。

ＳＫＰ１２８柱穴様ピット

ＨＥ７に位置する。漸移層で確認した。隅丸方形を呈すと推測される。深さ48㎝、確認プランで径74㎝を測る。柱穴と考えられる掘り込みが複数あるが切合わない。６層に分けられた。４、６層には根固めの可能性のある灰色の土が含まれる。ＳＫＰ１２５に切られる。かわらけ１点が南側掘り込みから出土した。

２　遺構外出土遺物

陶磁器は、15世紀末から17世紀初頭、18世紀以降の個体が含まれる。大部分は中世から近世初頭に属すると考えられる。中国産染付（３～５）、国産の志野（６）、唐津（７～９）などが出土した。また、坩堝（12）が出土している。図示したもののほか、白磁、かわらけも発見された。器種は主に皿である。鉢や甕と考えられる遺物は18世紀以降の唐津（10・11）と考えられる。鉄製品は釘（13）、棒状の製品が多い。

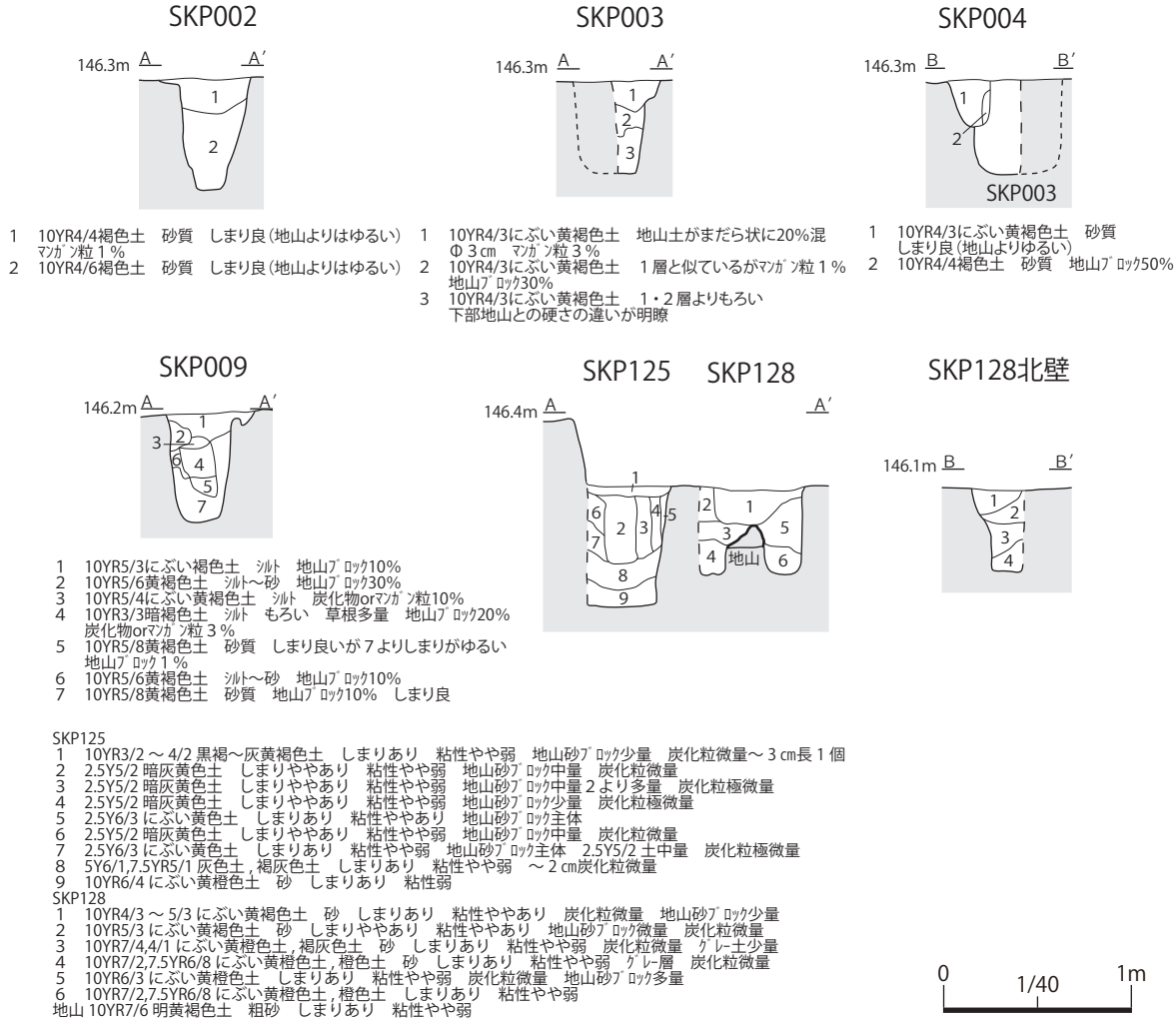


図１２　ＳＫＰ００２～１２８柱穴様ピット

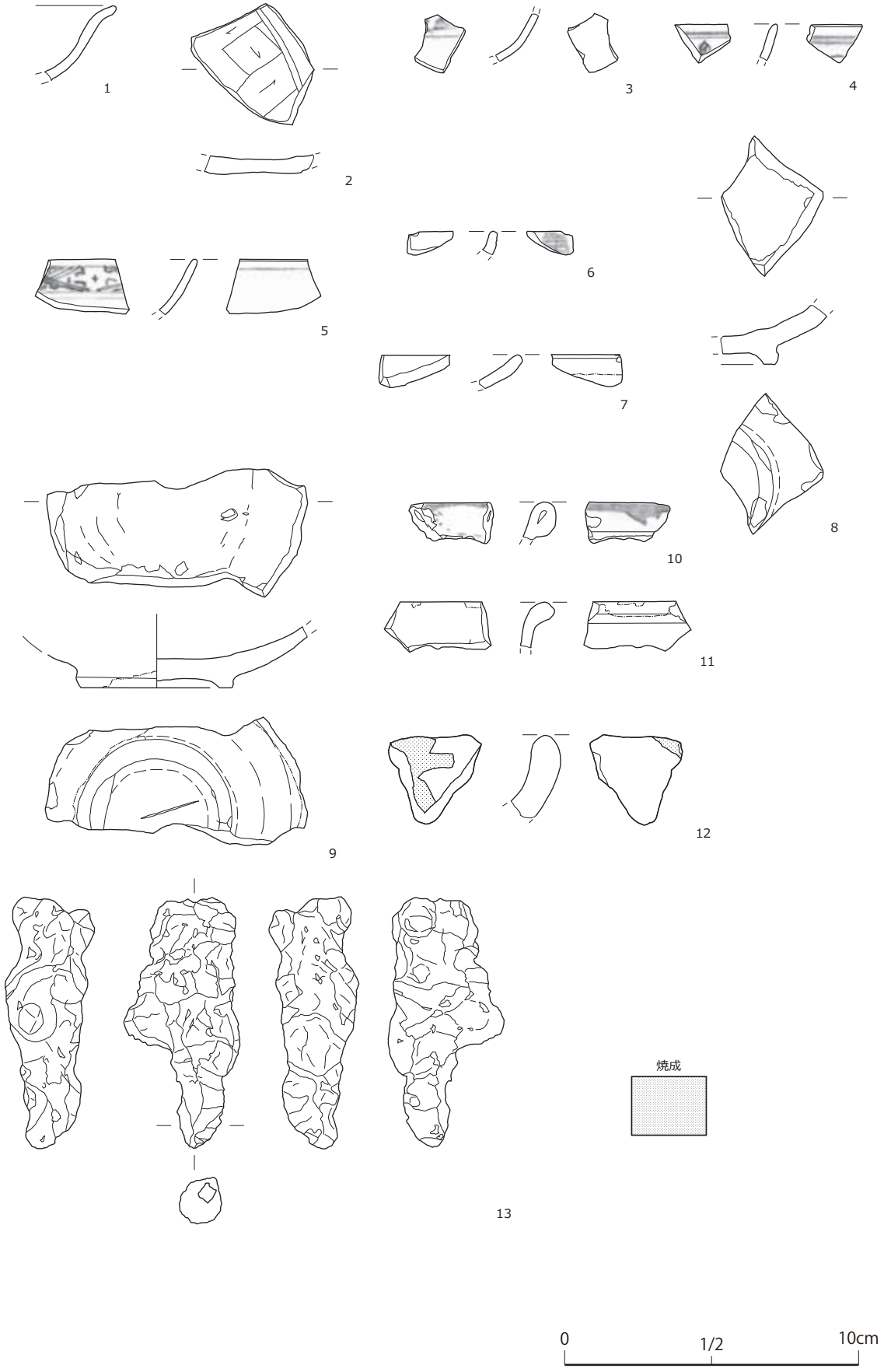


図１３　通称「本丸」出土遺物

表２　ＳＫＰ柱穴様ピット註記一覧

SKP No.	調査区	土色	土質	しまり	粘性	混入物
008	HE1	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト	あり	やや弱	地山ブロック30%
010	HE1	10YR3/3暗褐色		あり	やや弱	
018	HE1	10YR4/2～6/3灰黄褐色～にぶい黄橙色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量
019	HE1	10YR5/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量
023	HE1	10YR4/1、5/3褐灰色、にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量
024	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒微量　酸化粒微量
025	HE3	10YR4/2～5/3灰黄褐色～にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒微量　～3㎜礫微量
027	HE3	10YR5/2灰黄褐色	シルト質粘土	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　アマジャク粒微量
028	HE3	10YR5/2～5/3灰黄褐色～にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量2%　アマジャク粒微量　15㎝礫1個
029	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量
030	HE3	10YR4/2～3/2灰黄褐色～黒褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量
033	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒微量
034	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	アタリ　10YR5/2　地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒微量　粘土粒微量　焼土微量
035	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	アタリ　10YR4/2　地山砂ブロック中量　～2㎝炭化粒微量　アマジャク粒極微量　粘土粒微量
036	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　粘土粒微量　焼土微量
037	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック少量　炭化粒微量
038	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量　10YR4/2土少量
039	HE3	10YR5/2～6/2灰黄褐色～灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　酸化粒微量
040	HE3	10YR5/1～5/2褐灰色～灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量　粘土粒微量　壁赤み
041	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　粘土粒微量　酸化粒微量
042	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	アタリ　10YR4/2　地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒微量
043	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒微量　10YR7/2砂多量
044	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　酸化粒微量
046	HE3	10YR4/1～4/2褐灰色～灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山ブロック中量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量　粘土粒微量　平礫１個
047	HE3	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　アマジャク粒微量　粘土ブロック少量
048	HE3	10YR6/4にぶい黄橙色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック多量　10YR4/2土少量
050	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　アマジャク粒微量
051	HE3	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　～2cmアマジャク少量　粘質土多量
059	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	アタリ　10YR5/2　地山砂ブロック中量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量　酸化粒微量
060	HE3	10YR5/2～5/3灰黄褐色～にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　～1cmアマジャク粒微量　酸化粒微量　粘土粒微量
061	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　酸化粒極微量
062	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	アタリ　10YR5/2　地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　酸化粒極微量　粘土粒微量
063	HE3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　粘土ブロック少量
064	HE3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック少量　炭化粒微量　～3㎜礫微量　～2cm礫1個
070	HE7	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	10YR4/2土まだら　地山砂ブロック中量　炭化粒微量　～5cm礫微量
071	HE7	10YR5/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒2%　アマジャク微量
072	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂			10YR3/2土少量　地山砂ブロック中量　炭化粒微量　鋭いアマジャク微量
073	HE7	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	ややあり	10YR4/2土まだら　地山砂ブロック中量　炭化粒微量　～1cmアマジャク微量
074	HE7	10YR3/2黒褐色	砂	ややあり	ややあり	～1㎝アマジャク微量　炭化粒微量
075	HE7	やや赤みの10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック少量　炭化粒微量
076	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂			地山砂ブロック微量　炭化粒極微量　～1㎝アマジャク微量
078	HE7	10YR3/2黒褐色	砂質シルト			地山砂ブロック微量　炭化粒微量
079	HE6	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒微量　酸化粒微量　6A2層に削平される
080	HE6	10YR4/2灰黄褐色	砂			地山砂ブロック少量　炭化粒微量　酸化粒微量
081	HE6	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック微量　アマジャク粒極微量
082	HE6	10YR4/2灰黄褐色	砂			地山砂ブロック微量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量
083	HE6	10YR4/2灰黄褐色	砂			地山砂ブロック微量
084	HE6	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　アマジャク粒２%
085	HE6	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒極微量　アマジャク粒微量
086	HE6	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量　6A2層造成土に近い
087	HE5	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量
088	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	弱	地山砂ブロック微量
089	HE5	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック中量　～2㎝長炭化粒微量
090	HE5	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック少～中量　炭化粒微量
091	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック中量
092	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂			炭化粒微量

093	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	弱	
094	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック中量　～1cm炭化粒微量　アマジャク粒微量　酸化粒微量
095	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック少量　～1cm炭化粒微量　アマジャク粒微量　酸化粒微量
096	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量　～2mm礫微量
097	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量
098	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量
099	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　酸化粒微量
100	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　白粘土微量
101	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒少量　～2mm礫微量
102	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック中量　炭化粒極微量　粘土ブロック微量
103	HE9	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック少量
104	HE9	10YR4/1～4/2褐灰色～灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　焼土微量
105	HE9	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒微量
106	HE9	10YR5/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　アマジャク粒微量
107	HE9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量
108	HE9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック多量　炭化粒微量
109	HE9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒2%
110	HE9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒2%
111	HE9	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック微量　炭化粒2%
115	HE7	10YR5/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック多量　炭化粒極微量　酸化ブロック少量
116	HE7	10YR5/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック多量　炭化粒微量　鋭いアマジャク微量
117	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	地山砂ブロック微量　炭化粒微量　～1cm鋭いアマジャク微量
118	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　～5cmマ礫微量
119	HE7	10YR4/2～3/2灰黄褐色～黒褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック極微量　炭化粒微量
120	HE7	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒極微量　アマジャク粒微量
121	HE7	10YR4/2～5/3灰黄褐色～にぶい灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒2%　アマジャク粒微量
122	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク微量　10YR3/2土少量
124	HE7	10YR4/2～5/3灰黄褐色～にぶい灰黄褐色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒微量
126	HE7	10YR3/1～4/2黒褐色～灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	地山砂ブロック多量　～3cm炭化粒微量1個　アマジャク微量
127	HE7	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク粒微量
129	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック微量
130	HE5	10YR4/2灰黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク微量　10cm礫1個　3cm円礫1個
131	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック中量　炭化粒極微量
132	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量
135	HE5	10YR5/2、7/4灰黄褐色、にぶい黄橙色	砂	あり	やや弱	地山砂ブロック多量　炭化粒微量
136	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック少量　炭化粒微量
137	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	あり	弱	地山砂ブロック少量　炭化粒微量　アマジャク極微量
140	HE5	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質	ややあり	やや弱	
141	HE5	10YR5/2～4/2灰黄褐色		ややあり	ややあり	砂ブロック中量　炭化粒微量
142	HE5	10YR5/3にぶい黄褐色		ややあり	ややあり	地山ブロック中量　炭化粒微量
146	HE5	10YR4/3～5/2にぶい黄褐色～灰黄褐色		ややあり	やや弱	地山少量　炭化粒微量
148	HE5	10YR3/2黒褐色	砂質シルト			炭化粒多量　～1cmアマジャク少量　粘土ブロック少量
149	HE5	10YR3/2黒褐色	砂			粘土ブロック少量　アマジャク少量　炭化粒2%
150	HE5	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土			粘土ブロック少量　円礫混入　炭化粒2%　SKI土多量
151	HE10	10YR4/2灰黄褐色	砂			10YR4/1土中量　炭化粒微量　焼土微量
152	HE10	10YR4/2～5/3灰黄褐色～にぶい黄褐色	砂			10YR4/1土少量　炭化粒微量　壁焼成か
155	HE10	10YR4/1～3/1褐灰色～黒褐色	砂質シルト	ややあり	やや弱	地山砂ブロック少量　アマジャクブロック微量　炭化粒微量　酸化粒微量
156	HE10	10YR4/1～3/1褐灰色～黒褐色	砂質シルト	あり	やや弱	地山砂ブロック少量　アマジャクブロック微量　炭化粒微量　酸化粒微量
157	HE10	10YR5/2～5/3灰黄褐色～にぶい黄褐色	砂			地山砂ブロック多量　炭化粒微量　5YR5/6土少量
158	HE3	10YR6/4にぶい黄橙色	砂	あり	やや弱	地山砂主体　10YR5/3土中量　アマジャク粒極微量
159	HE3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒極微量　アマジャク粒極微量
160	HE3	10YR5/2～4/2灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	やや弱	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量　アマジャク粒微量
161	HE3	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	やや弱	地山砂ブロック中量　炭化粒微量　アマジャク粒極微量　酸化粒微量
162	HE10	10YR4/1～4/2褐灰色～灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	炭化粒微量　アマジャク微量
163	HE10	10YR4/2灰黄褐色	砂	ややあり	ややあり	地山砂ブロック微量　炭化粒極微量　～2cm焼礫1個

第２節　堆積状況確認のための試掘調査

倒木によるき損箇所について、城館造成などによる堆積の状況、遺構・遺物の有無を確認するために行った。き損箇所を最低限度広げて土層を確認し、地山まで掘り下げ、遺構の有無を確認した。調査箇所はテストピット（以下ＴＰ）と呼称する。確認・記録保存の後、埋め戻して、き損前の原状に復旧した。全体で遺構は検出されなかったが、土塁、曲輪等の造成痕跡が確認されている。

ＴＰ１（第１６図）

古寺地区の池の東縁に位置する。倒木による根返りでき損した倒木西側を北調査区、倒れるときに生じた倒木南東側のき損箇所を南調査区とした。調査区の標高は約94.6～94.9ｍである。

検出遺構・出土遺物

北調査区地表面約60㎝下から炭混じりの層が検出された。曲輪・池造成の堆積層と自然堆積の可能性がある。また、現在確認できる池の形態となる以前の池の沈殿堆積の可能性もある。

中国産染付の縁折れの皿（14、15）、青磁（16）、大窯天目茶碗（17）のほか、近世・近代の鉢（18）が見つかった。また、梵字の陰刻された石碑（19）が出土した。全て倒木の根周りからの出土である。

ＴＰ２（第１７図）

通称「三の丸」北側曲輪の縁辺部に位置する。調査区は標高約133.6～133.8ｍである。

検出遺構・出土遺物

盛土されていることが判明し、曲輪造成の痕跡が確認された。遺物は出土しなかった。

ＴＰ３Ａ、Ｂ（第１８図）

通称「本丸」下、南曲輪の西側に位置する。南曲輪は東西に長く、二つの尾根を平らに造成している。西側はゆるやかに低くなり平場を構成する。倒木が連続しているが、き損箇所がつながらないため東側をＡ、西側をＢと分けて調査した。調査区の標高は約129.7～130.1ｍである。

検出遺構・出土遺物

現地表面が曲輪造成によるものと仮定すると２種類の地山があると捉えられる。未固結あるいは破砕した頁岩の堆積層と、微細な頁岩片・粒由来の水成堆積層と考えられる。後者には粘土層や植物遺体、凝灰質の礫、微量の炭化物が見られる。深掘りしたところ、旧表土等は確認されず基盤の泥岩層が検出されたことから自然堆積の可能性が高い。

遺物は３Ａから中国産染付皿（20～22）、大窯端反皿（23）、鉄釉内禿皿（24）、描線が鼠色の発色を呈す志野鉄絵皿（25）、唐津皿（26、27）が見つかった。また用途不明の石製品（28）が出土した。近世・近代の磁器も数点見られる。３Ｂでは表土から大窯皿か小杯、粘土層から志野皿（29）が出土した。遺物が出土したことから生活空間であった可能性があるものの明確な遺構は検出されなかった。

ＴＰ４Ａ、Ｂ（第１９図）

通称「本丸」下、西曲輪の南切岸中腹（Ａ）と南縁（Ｂ）に位置する。曲輪の東端は通称「本丸」下南から西をめぐる城内道が通る堀底道と土塁で区画されている。調査区４Ａは標高約135.1～136.2ｍ、４Ｂは137.4～138.1ｍである。

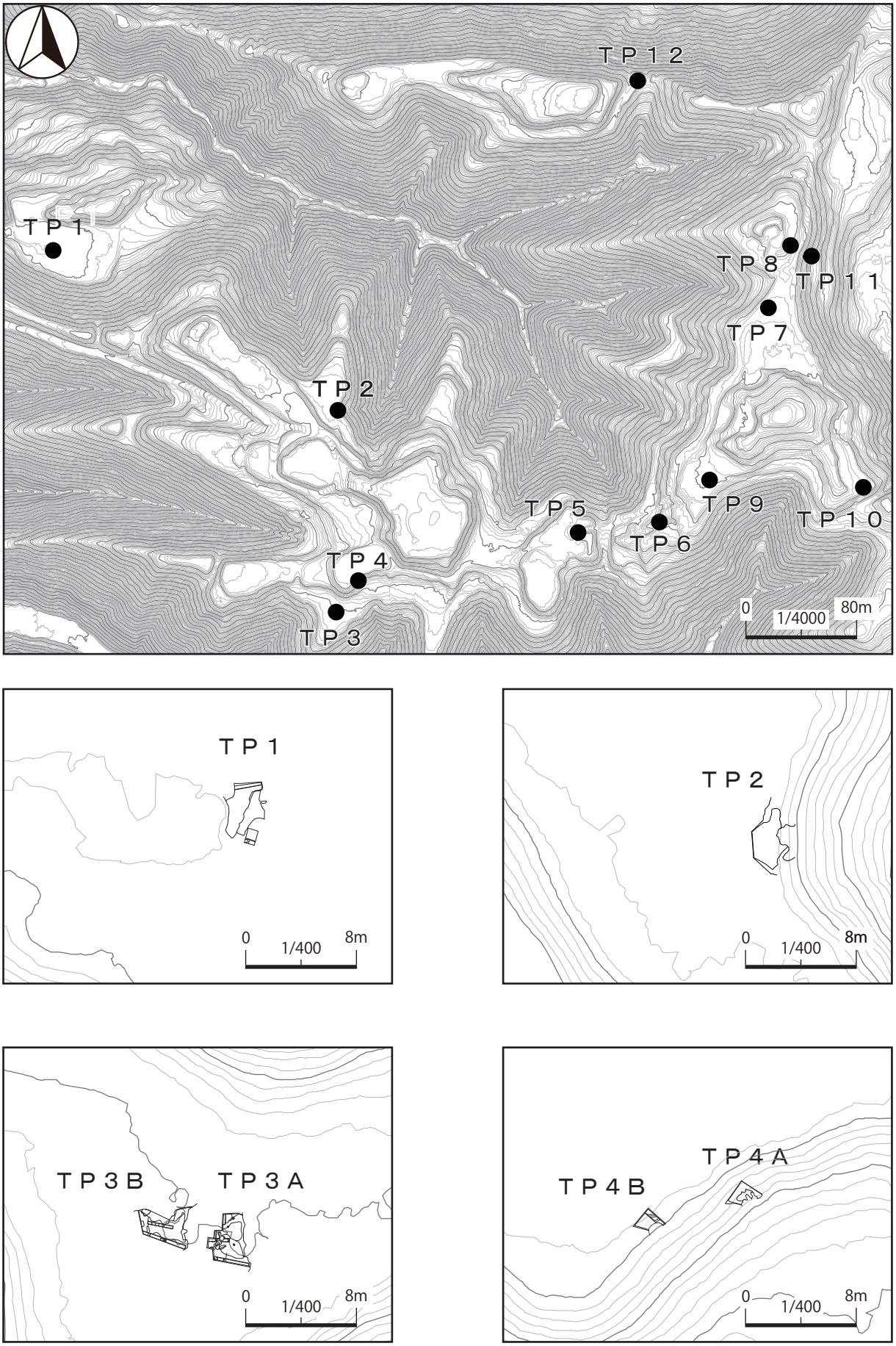


図１４　ＴＰ（テストピット）位置全体図・ＴＰ１～４Ａ・Ｂ位置図

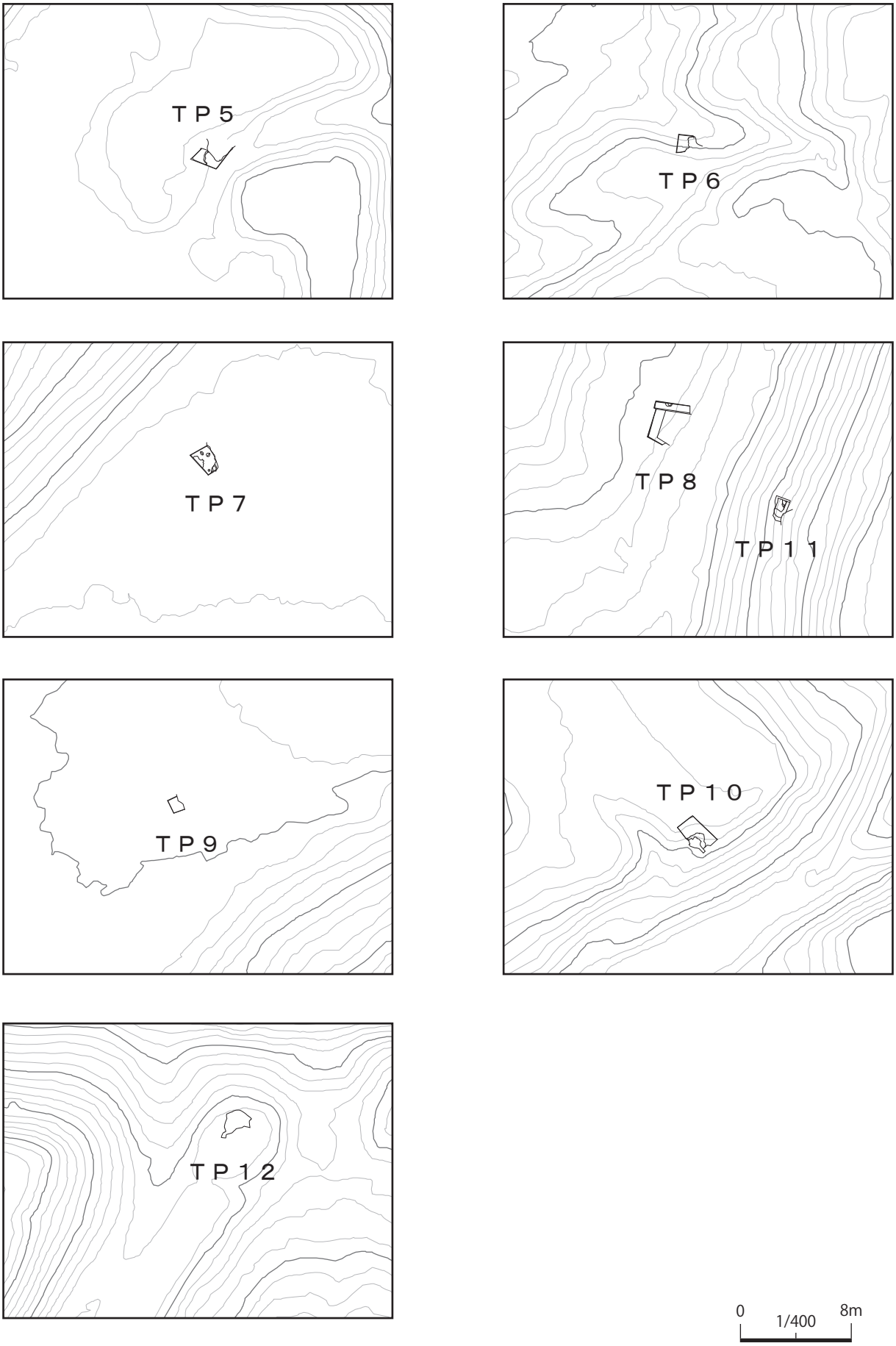


図１５　ＴＰ５～１２位置図

検出遺構・出土遺物

４Ａは、き損が地山まで達していたが、明確な掘削の痕跡は確認できなかった。堆積は切岸と考えると複雑であることから崩落等による自然堆積と考えられる。４Ｂでは水平堆積が確認できた。地山面での削平は明確でないが、曲輪造成と、その後の堆積と考えられる。遺物は４Ａで、中国産染付皿（30）、志野、唐津皿（31）、碗形鍛冶滓（32）が出土した。

ＴＰ５（第２０図）

古城地区東端の枡形虎口北側土塁上に位置する。第３次調査トレンチ３と４の間にあたる。枡形内側のややテラス状地形から通路までを含む。標高は約141.2～141.9ｍである。

検出遺構・出土遺物

枡形中央通路よりも高い位置で地山が検出されていることから、土塁は地山を切り崩したうえで掘り残して造成されていたことがわかる。その上の堆積は版築状を呈している。遺物は、版築状の堆積土中から唐津壺口縁（33）が出土した。

ＴＰ６（第２０図）

古古城地区東端枡形虎口の堀切の対岸と、将軍山西側の曲輪の間にあたり、将軍山地区西側に位置する。一帯には性格不明の堀状地形や矮小な平場が連続する。標高は約144.1～145.2ｍである。

検出遺構・出土遺物

切岸あるいは通路状の地形は、未固結頁岩の地山を掘削して造成されている。遺物は出土しなかった。

ＴＰ７（第２０図）

将軍山曲輪北側に位置する。倒木が広葉樹であったため、き損は浅く収まった。調査区の標高は約151.1～151.2ｍである。

検出遺構・出土遺物

堆積が薄く、後世に削平された可能性がある。遺物は出土しなかった。

ＴＰ８（第２１図）

将軍山地区北側の館神堂跡をめぐる腰曲輪東縁に位置する。東下には将軍山地区から中館地区へと続く城内道が通り、その城内道の東縁から下は水ノ口地区との間の切岸を構成している。調査区の標高は約151.5～152.2ｍである。

検出遺構・出土遺物

時期不明の掘り込みが確認された。堆積土のしまり具合から中世の遺構ではないと判断した。遺物は出土しなかった。

ＴＰ９（第２１図）

将軍山西側の曲輪中央に位置する。調査区の標高は約152.6～152.7ｍである。

検出遺構・出土遺物

根起こしされた範囲は矮小で浅く、明確な曲輪造成の痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

ＴＰ１０（第２１図）

将軍山地区南端の大堀切北縁に位置する。大堀切には北壁を通って将軍山中心部に向かう城内道が配置されているが、本調査区は複数の道跡のうちの一部にかかっている。標高は約152.9～153.6ｍである。

検出遺構・出土遺物

調査区は堀切内部まで達していないが、地山の状況から、堀切造成に伴って縁部分の平場まで削平している可能性がある。平場は堀切造成で掘削された膨大な土量を盛って作られてはおらず、形を整える程度の盛土とみられる。遺物は出土しなかった。

ＴＰ１１（第２２図）

ＴＰ８の東、将軍山地区と水ノ口地区の間に位置する切岸中腹にあたる。標高は約147.2～148.2mである。

検出遺構・出土遺物

地山を削って作られた切岸である。堆積は崩落土を含む自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

ＴＰ１２（第２２図）

中館地区東端にあたる堀底道を含む防御構造の一部を成す土塁上に位置する。調査区の標高は約127.9～128.8mである。

検出遺構・出土遺物

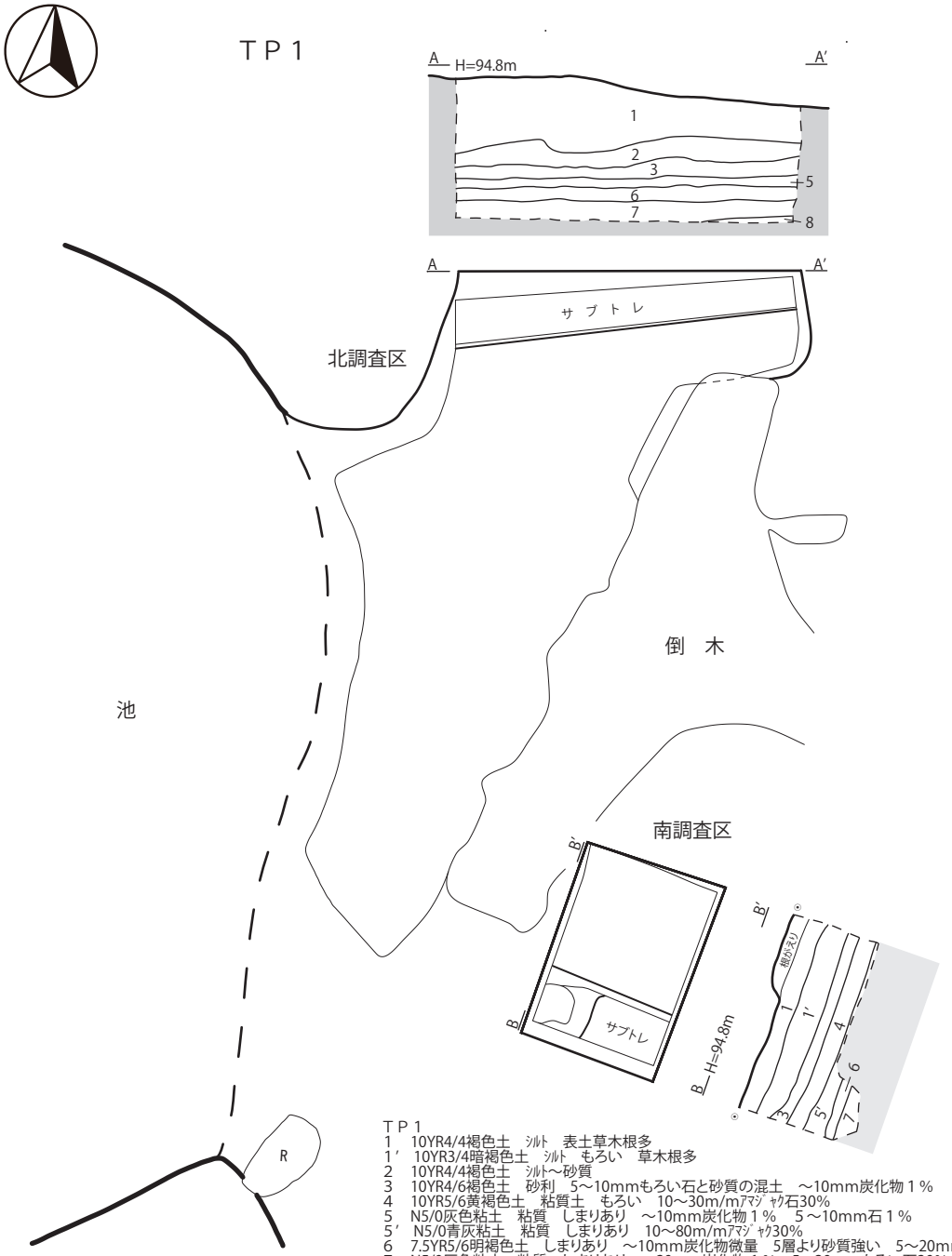
厚い表土の下は地山で、少なくとも北側の土塁は、地山を削り出して形成された土塁であったことが判明した。遺物は出土しなかった。

小　結

城跡造成の手法として、盛土が多用されていないことが、今回の調査で明らかになった檜山城跡の特徴である。ただし、調査箇所は偶然による倒木が起こった場所であり、サンプルとして少ないうえにバイアスのかかった恣意的な位置の調査である。たまたま切土により造成された箇所が多かったと考えるのが妥当である。一方で削平した土を盛土することで曲輪を広げているのが確認されたのはＴＰ２のみで、大堀切などの造成により削られた土量はどこへ盛られているのか、全体を通しての課題となった。

地山は、砂であるＴＰ２、砂と砂利層のＴＰ４Ｂが海成堆積により形成された石倉山層と考えられる。それを除く大部分の地点では、シルト質の砂から粘土で、ＴＰ５、６、７、１１は女川層由来の礫状に砕ける未固結の泥岩層を含む。ＴＰ３の西側は、水成堆積により他とは違う様相を見せている。凝灰質の礫の混入を含めて、人為的か自然堆積かの判断は困難である。ＴＰ１２については粘性がなく、石倉山層の可能性もあるが、色調からは女川層を含む層の二次堆積の可能性もある。ＴＰ１の堆積は池の造成と関わる。第３次調査のＴＰ１では古寺地区メインの曲輪（今回の調査区のある曲輪）で、北側の縁辺近くは盛土で広げられていることが確認されている。その際の地山は女川層の礫の二次堆積と考えられる。今回の調査区では細かい礫の堆積が見られたほか、砂の堆積が確認でき、水成堆積と考えられ、さらにその上に盛土がされている。

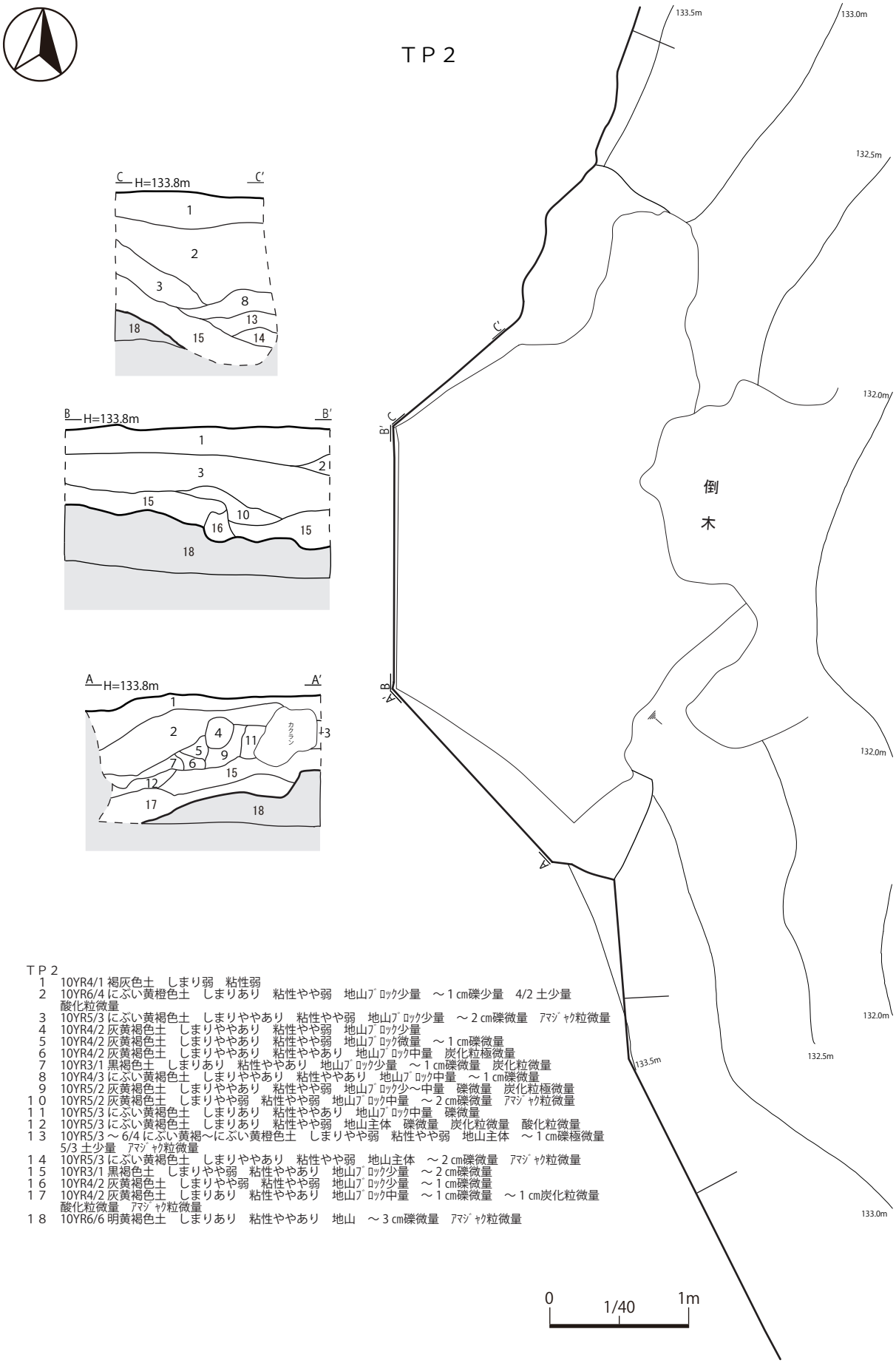
調査区は今も水が溜まっている池と、輪郭が人為的に構築された窪み―おそらくは水を湛えていたであろう窪みの間に位置し、炭が一定量みられる層が面で検出できたことから、今の池の形とは違う形の池が前段階で存在し、そのときの底にたまった沈殿物に炭が入っていると想定できる。その後に、現在の池が構築され、その際の構築土に石碑が含まれていたか、辺に立てられていた石碑が埋まったものとみることができよう。



ＴＰ１
1　10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ　表土草木根多
1′　10YR3/4暗褐色土　ｼﾙﾄ　もろい　草木根多
2　10YR4/4褐色土　ｼﾙﾄ～砂質
3　10YR4/6褐色土　砂利　5～10mmもろい石と砂質の混土　～10mm炭化物１％
4　10YR5/6黄褐色土　粘質土　もろい　10～30m/mｱﾏｼﾞｬｸ石30%
5　N5/0灰色粘土　粘質　しまりあり　～10mm炭化物１％　５～10mm石１％
5′　N5/0青灰粘土　粘質　しまりあり　10～80m/mｱﾏｼﾞｬｸ30%
6　7.5YR5/6明褐色土　しまりあり　～10mm炭化物微量　5層より砂質強い　5～20mm石10%
7　N5/0灰色粘土　粘質　しまりあり　～20mm炭化物１％　5～20mmもろい石30%
8　7.5YR2/3極暗褐色土　粘土　5～30mmｱﾏｼﾞｬｸ10%　植物痕含

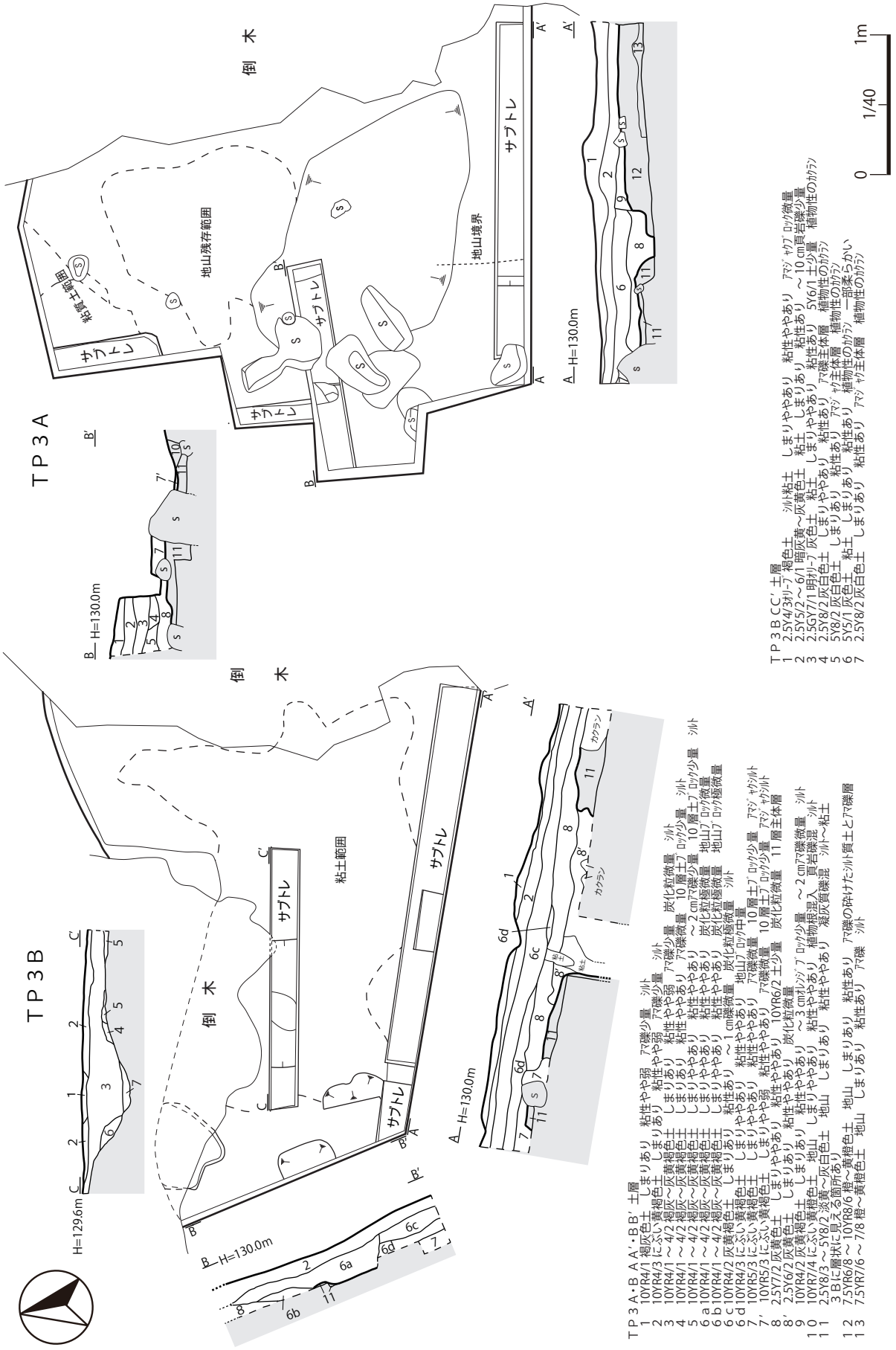
0　1/40　1m

図16　ＴＰ１



ＴＰ２
１　10YR4/1 褐灰色土　しまり弱　粘性弱
２　10YR6/4 にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　～１cm礫少量　4/2 土少量　酸化粒微量
３　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　～２cm礫微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
４　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
５　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ微量　～１cm礫微量
６　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　炭化粒極微量
７　10YR3/1 黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　～１cm礫微量　炭化粒微量
８　10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　～１cm礫微量
９　10YR5/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少～中量　礫微量　炭化粒極微量
１０　10YR5/2 灰黄褐色土　しまりやや弱　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　～２cm礫微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
１１　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　礫微量
１２　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　地山主体　礫微量　炭化粒微量　酸化粒微量
１３　10YR5/3 ～ 6/4 にぶい黄褐～にぶい黄橙色土　しまりやや弱　粘性やや弱　地山主体　～１cm礫極微量　5/3 土少量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
１４　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山主体　～２cm礫微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
１５　10YR3/1 黒褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　～２cm礫微量
１６　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりやや弱　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　～１cm礫微量
１７　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量　～１cm礫微量　～１cm炭化粒微量　酸化粒微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量
１８　10YR6/6 明黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山　～３cm礫微量　ｱﾏｼﾞｬｸ粒微量

図１７　ＴＰ２



TP3A・BA A′・BB′ 土層
1 10YR4/1 褐灰色土　しまりあり　粘性やや弱　アマ礫少量　シルト
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　アマ礫少量　シルト
3 10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりあり　粘性　アマ礫微量　炭化粒微量　シルト
4 10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　～ 2 cmアマ礫少量　10層土ブロック少量　シルト
5 10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やややあり　炭化粒極微量　地山ブロック微量
6 a 10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やややあり　炭化粒極微量　地山ブロック極微量
6 b 10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やややあり　炭化粒極微量
6 c 10YR4/2 灰黄褐色土　しまり　～ 1 cm礫微量　シルト
6 d 10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やややあり　炭化粒極微量
7 10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やややあり　地山ブロック中量
7′ 10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性やややあり　アマ礫微量　10層土ブロック少量　アマジャケシルト
8 2.5Y7/2 灰黄色土　しまりややあり　粘性やややあり　アマ礫微量　10層土ブロック少量　アマジャケシルト
8′ 2.5Y6/2 灰黄色土　しまりあり　粘性ややあり　炭化粒微量　10YR6/2 土少量　炭化粒微量　11層主体層
9 10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　～ 3 cmオリンジブロック少量　～ 2 cmアマ礫微量　シルト
10 10YR7/4 にぶい黄橙色土　地山　しまりあり　粘性ややあり　植物根混入　～ 2 cmアマ礫微量　シルト
11 2.5Y8/3 ～ 5Y8/2 淡黄～灰白色土　地山　しまりあり　粘性ややあり　凝灰質礫混　シルト～粘土
3 B に層状に見える箇所あり
12 7.5YR6/8 ～ 10YR8/6 橙～黄橙色土　地山　しまりあり　粘性あり　アマ礫の砕けたシルト質土とアマ礫層
13 7.5YR7/6 ～ 7/8 橙～黄橙色土　地山　しまりあり　粘性あり　アマ礫　シルト

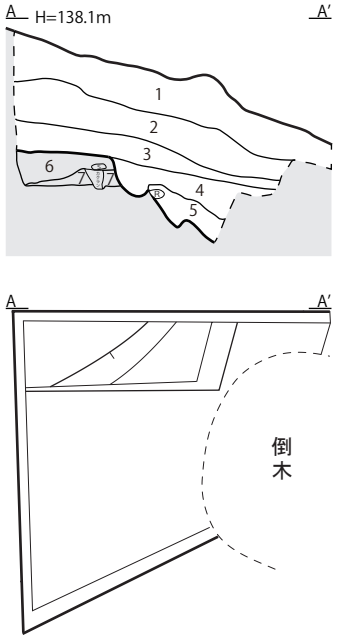
TP3BCC′ 土層
1 2.5Y4/3オリーブ褐色土　シルト粘土　しまりややあり　粘性ややあり　アマジャウブロック微量
2 2.5Y5/2 ～ 6/1 暗灰黄～灰黄色土　粘土　しまりあり　粘性あり　～ 10 cm貫岩礫少量
3 2.5GY7/1 明オリーブ灰色土　粘土　しまりややあり　粘性あり　5Y6/1 土少量　植物性のカクラン
4 2.5Y8/2 灰白色土　しまりややあり　粘性あり　アマ礫主体層　植物性のカクラン
5 5Y8/2 灰白色土　しまりあり　粘性あり　アマジャケ主体層　植物性のカクラン
6 5Y5/1 灰色土　粘土　しまりあり　粘性あり　植物性のカクラン　アマジャケ主体層　一部柔らかい
7 2.5Y8/2 灰白色土　粘土　しまりあり　粘性あり　アマジャケ主体層　植物性のカクラン

図18　TP3A･B

ＴＰ４Ａ

ＴＰ４ＡＡＡ'・ＢＢ' 土層
１　10YR4/1 褐灰色土　しまりややあり　粘性弱
２　10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性弱　～２cm礫少量
３　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　～１cm礫微量　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量
４　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性弱　～１cm礫少量　炭化粒微量　地山ﾌﾞﾛｯｸ微量　7.5YR5/6ｵﾚﾝｼﾞ粒
５　10YR4/2 ～ 4/3 灰黄褐～にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　～１cm礫微量　炭化粒微量　地山ﾌﾞﾛｯｸ微量
６　2.5Y5/3 黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　～１cm礫微量　炭化粒微量　地山ﾌﾞﾛｯｸ多量
７　2.5Y4/2 ～ 5/2 暗灰黄色土　しまりあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯ少量
８　10YR3/1 ～ 4/2 黒褐～灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
９　10YR5/6 黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　ｲｴﾛｰﾊﾞﾝﾄﾞ　５層土微量（境目に）
１０　10YR4/1 ～ 4/2 褐灰～灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　ﾌﾞﾗｯｸﾊﾞﾝﾄﾞ　地山土中量　上の方が濃い色
１１　10YR5/6 ～ 5/3 黄褐～にぶい黄褐色土　しまりや弱　粘性やや弱　4･10 層土少量
１２　10YR5/6 黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　10 層土少量
１３　10YR5/4 ～ 6/6 にぶい黄褐～明黄褐色土　漸移層　しまりあり　粘性やや弱　２層土少量　～１cm礫微量
１４　10YR5/4 ～ 6/6 にぶい黄褐～明黄褐色土　地山　しまりあり　粘性ややあり　ｼﾙﾄ砂　～１cmﾏﾒ礫微量　～２cm礫微量
１５　10YR5/4 ～ 6/6 にぶい黄褐～明黄褐色土　地山　しまりあり　粘性ややあり　ｼﾙﾄ砂　ｵﾚﾝｼﾞﾌﾞﾛｯｸ7.5YR5/6
１６　10YR6/6 明黄褐色土　地山　しまりあり　粘性ややあり　～２cm礫微量　7.5YR5/6 微量

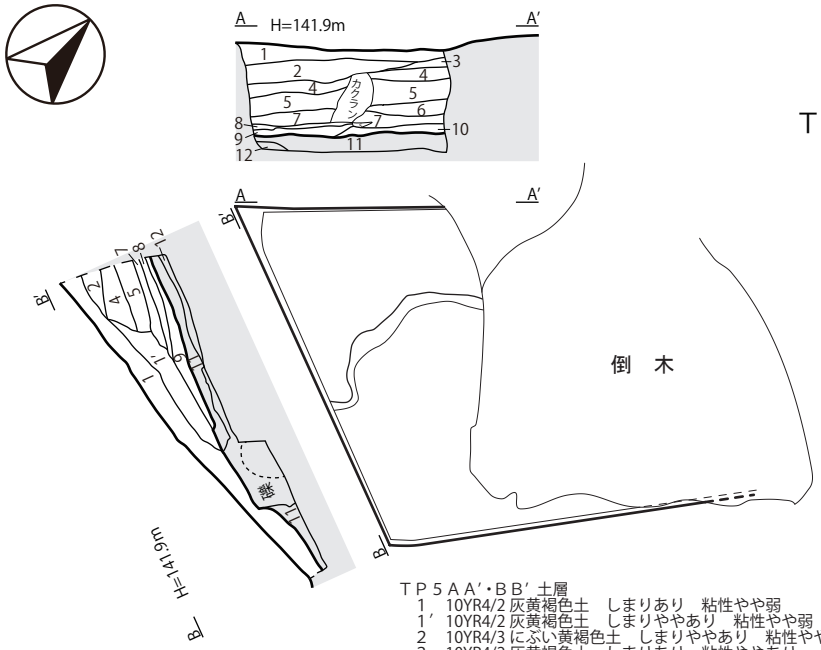
ＴＰ４Ｂ



ＴＰ４Ｂ
１　表土　しまり弱　粘性弱
２　10YR4/2 灰黄褐色土　しまり弱　粘性やや弱　１～５cm砂利少量
３　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりやや弱　粘性やや弱
　１～５cm砂利少量　5/3 にぶい黄褐色土　になるかも
４　10YR5/3 ～ 5/4 にぶい黄褐色土　砂　しまりややあり　粘性弱
　～１cm礫微量
５　10YR5/4 にぶい黄褐色土　砂　しまりややあり　粘性弱
　～１cm礫極微量　～２cm固砂ﾌﾞﾛｯｸ１個
６　10YR6/6 明黄褐色土　砂利　しまりあり　粘性弱　～２cm礫多量
７　10YR6/4 ～ 6/6 にぶい黄橙～明黄褐色土　固砂　地山
　しまりあり　粘性なし

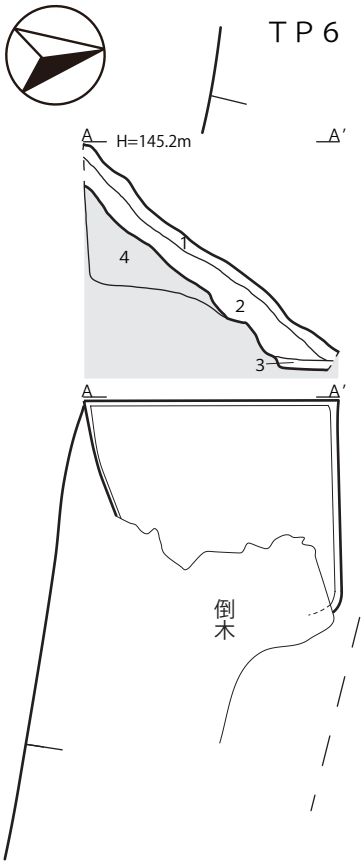
0　1/40　1m

図１９　ＴＰ４Ａ･Ｂ

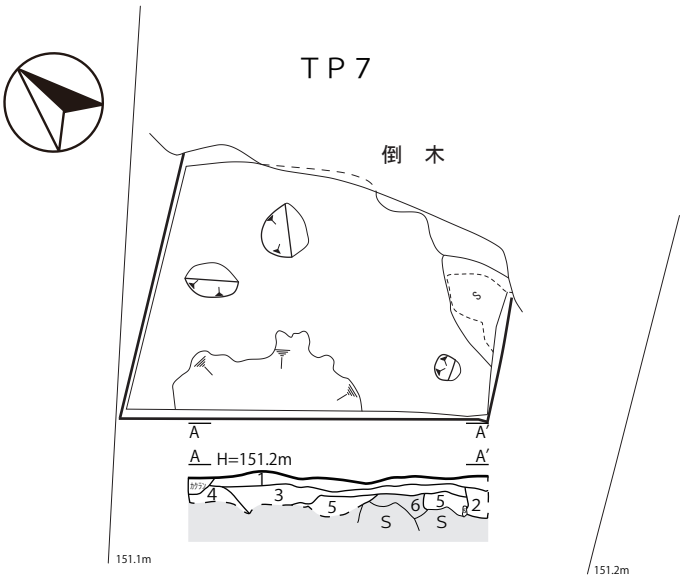


ＴＰ５

ＴＰ５ＡＡ′・ＢＢ′土層
１　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱
１′10YR4/2 灰黄褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　ｱﾏｼﾞｬｸ少量
２　10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸまだら多量　～１cmｱﾏｼﾞｬｸ微量
３　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　～１cmｱﾏｼﾞｬｸ少量
４　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸまだら中量　～１cmｱﾏｼﾞｬｸ微量
５　10YR6/3 にぶい黄橙色土　しまりややあり　粘性あり　ｱﾏ礫主体層
６　2.5Y4/2 暗灰黄色土　しまりあり　粘性あり　～２cmｱﾏｼﾞｬｸ多量
７　10YR3/1 ～ 2/1 黒褐～黒色土　しまりややあり　粘性ややあり　RP　～１cmｱﾏｼﾞｬｸ微量
８　10YR5/6 黄褐色土　しまりあり　砂質　粘性やや弱　７層土中量
９　10YR4/1 ～ 3/1 褐灰～黒褐色土　しまりややあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ微量
１０　10YR6/3 にぶい黄橙色土　粘土　しまりややあり　粘性あり　ｼﾙﾄ主体　～２cmｱﾏｼﾞｬｸ少量
１１　10YR6/6 ～ 7/4 明黄褐～にぶい黄橙色土　7.5YR6/8 橙色土　しまりややあり　粘性ややあり
ｱﾏ礫層の礫少ない部分　～３cmｱﾏ礫多量
１２　10YR8/2 灰白色土　しまりあり　粘性あり　細かいｱﾏｼﾞｬｸ層



ＴＰ６



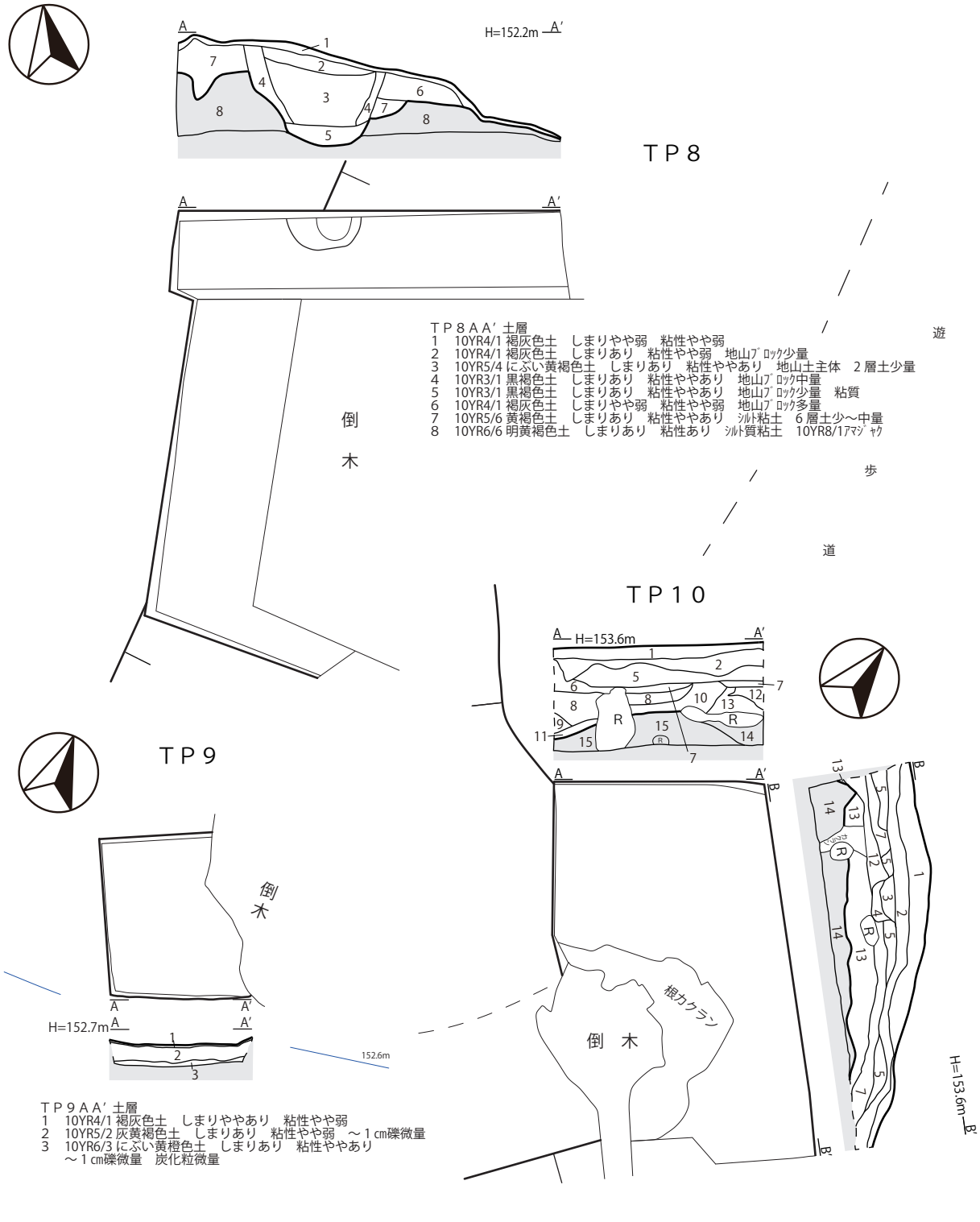
ＴＰ７

ＴＰ７ＡＡ′土層
１　10YR3/1 黒褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり　地山粒少量
２　10YR3/1 黒褐色土　しまり弱　粘性あり　～３cm礫中量
３　10YR3/1 黒褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり　炭化粒微量　地山粒微量
４　10YR3/1 黒褐色土　３より明るい　しまりやや弱　粘性ややあり　～３cm礫中量
５　10YR5/2 灰黄褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり　炭化粒極微量　～２cm礫少～中量
６　10YR7/6 明黄褐色土　しまりやや弱　粘性あり　ｼﾙﾄ礫主体地山　～２cm礫少量

ＴＰ６ＡＡ′土層
１　10YR4/2 ～ 3/1 灰黄褐～黒褐色土　しまり弱　粘性弱
２　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり　ボロボロｱﾏ礫微量
３　10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性あり　ｼﾙﾄ粘土
４　10YR7/2 にぶい黄橙色土　しまりややあり　粘性ややあり　ｱﾏ礫少量

0　1/40　1m

図２０　ＴＰ５～７



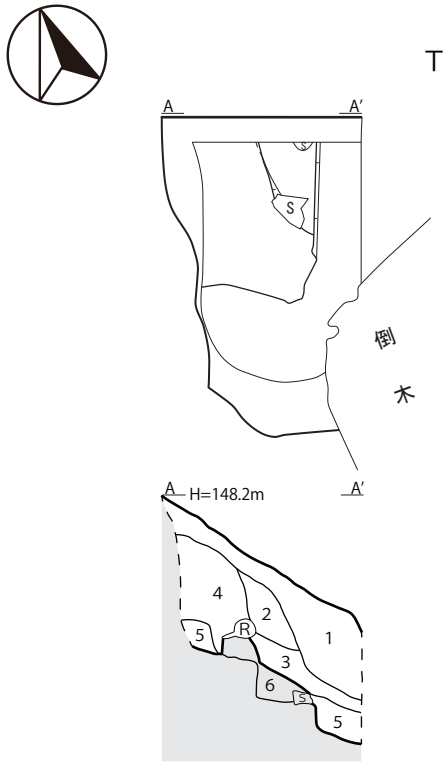
ＴＰ８ＡＡ′土層
1　10YR4/1 褐灰色土　しまりやや弱　粘性やや弱
2　10YR4/1 褐灰色土　しまりあり　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山土主体　２層土少量
4　10YR3/1 黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量
5　10YR3/1 黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量　粘質
6　10YR4/1 褐灰色土　しまりやや弱　粘性やや弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ多量
7　10YR5/6 黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　ｼﾙﾄ粘土　６層土少～中量
8　10YR6/6 明黄褐色土　しまりあり　粘性あり　ｼﾙﾄ質粘土　10YR8/1ｱﾏｼﾞｬｸ

ＴＰ９ＡＡ′土層
1　10YR4/1 褐灰色土　しまりややあり　粘性やや弱
2　10YR5/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性やや弱　～１㎝礫微量
3　10YR6/3 にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性ややあり
　～１㎝礫微量　炭化粒微量

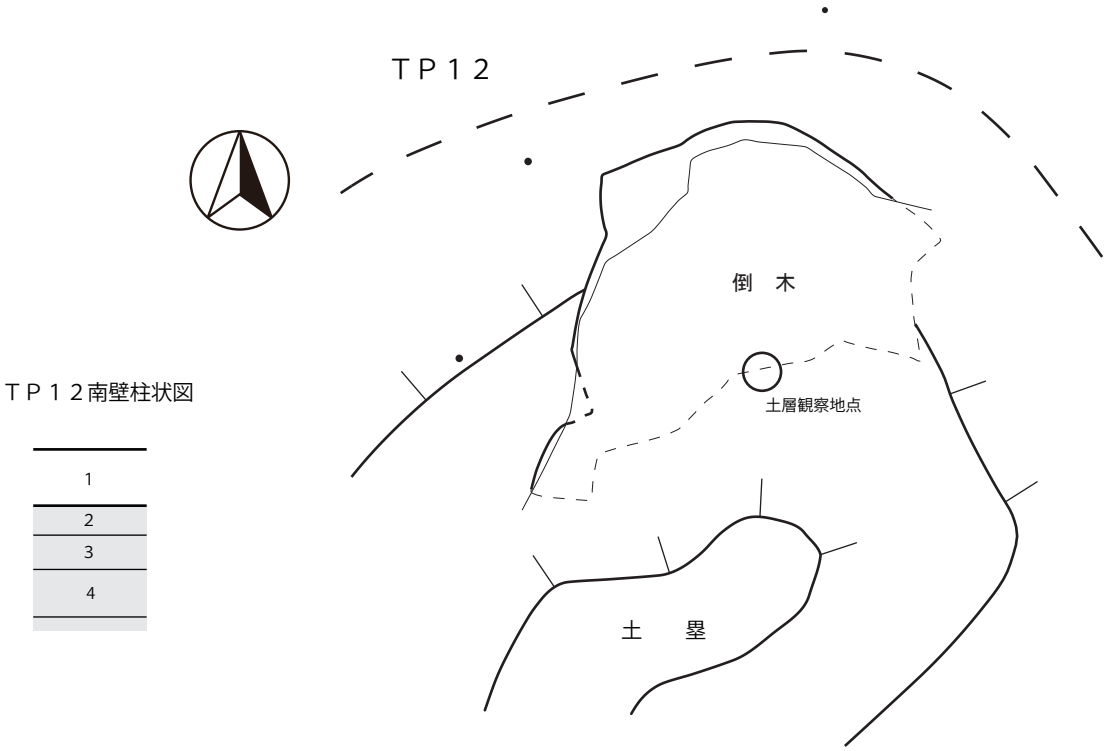
ＴＰ１０ＡＡ′・ＢＢ′土層
1　10YR4/1 褐灰色土　しまりあり　粘性弱
2　10YR5/1 褐灰色土　しまりあり　粘性弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量
3　10YR5/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
4　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性弱　地山ﾌﾞﾛｯｸ３層土少量
5　10YR6/6 明黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　10YR5/2 土微量
6　10YR5/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
7　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量
8　10YR6/4 にぶい黄橙色土　しまりややあり　粘性あり　地山主体　10YR3/1 土微量　ｱﾏｼﾞｬｸﾌﾞﾛｯｸ極微量
9　10YR6/4 にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性あり　地山主体　10YR3/1 土少量
１０　10YR5/4 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　10YR2/1 土少量　地山ﾌﾞﾛｯｸ多量　10YR6/2 土少量　ｱﾏｼﾞｬｸﾌﾞﾛｯｸ極微量
１１　10YR3/1 黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ少量
１２　10YR4/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　地山ﾌﾞﾛｯｸ多量
１３　10YR6/6 ～ 6/4 明黄褐～にぶい黄橙色土　しまりややあり　粘性あり　10YR5/3 土少量
１４　10YR6/6,8/2,7.5YR6/8 明黄褐色土 , 灰白色土 , 橙色土　しまりあり　粘性あり　地山
１５　10YR7/6 ～ 7/3 明黄褐～にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性あり　炭化粒極微量

0　1/40　1m

図２１　ＴＰ８～１０



ＴＰ１１
1　10YR4/1 褐灰色土　しまりなし　粘性あり
2　10YR4/2 灰黄褐色土　しまり弱　粘性あり
3　10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり
　地山ﾌﾞﾛｯｸ中量
4　10YR4/2 ～ 5/2 灰黄褐色土　しまりやや弱　粘性ややあり
　～ 2 ㎝ｱﾏ礫微量
5　10YR4/2 ～ 5/3 灰黄褐～にぶい黄褐色土 しまり弱　粘性あり
　～ 5 ㎜ｱﾏ礫微量　右側～ 2 ㎝炭化粒極微量　ｱﾏｼﾞｬｸ地山中量
6　10YR6/3 ～ 8/4 にぶい黄橙～浅黄橙色土　ｱﾏｼﾞｬｸ　しまり弱　粘性あり



ＴＰ１２
1 10YR3/2 黒褐色土 表土
2 10YR8/2 灰白色土 砂 地山 しまりあり 粘性なし ～ 1 ㎝礫微量
3 10YR7/4,8/3 にぶい黄橙色土 , 浅黄橙色土 砂 地山 しまりあり 粘性なし 10YR3/1ﾌﾞﾛｯｸ
4 10YR7/6,8/1 明黄褐色土 , 灰白色土 砂 地山 しまりあり 粘性なし

0　1/40　1m

図２２　ＴＰ１１・１２

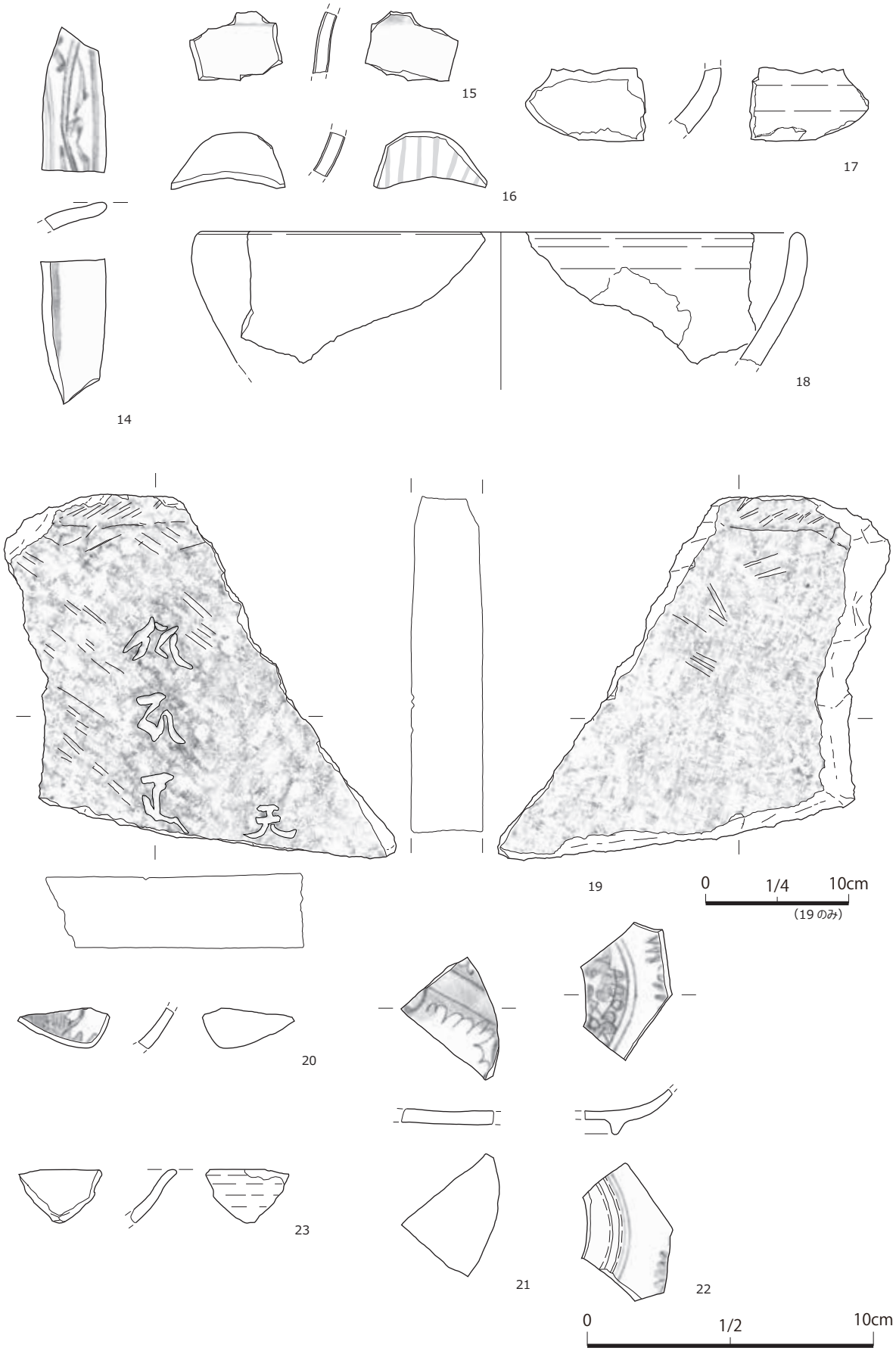


図２３　ＴＰ出土遺物（１）

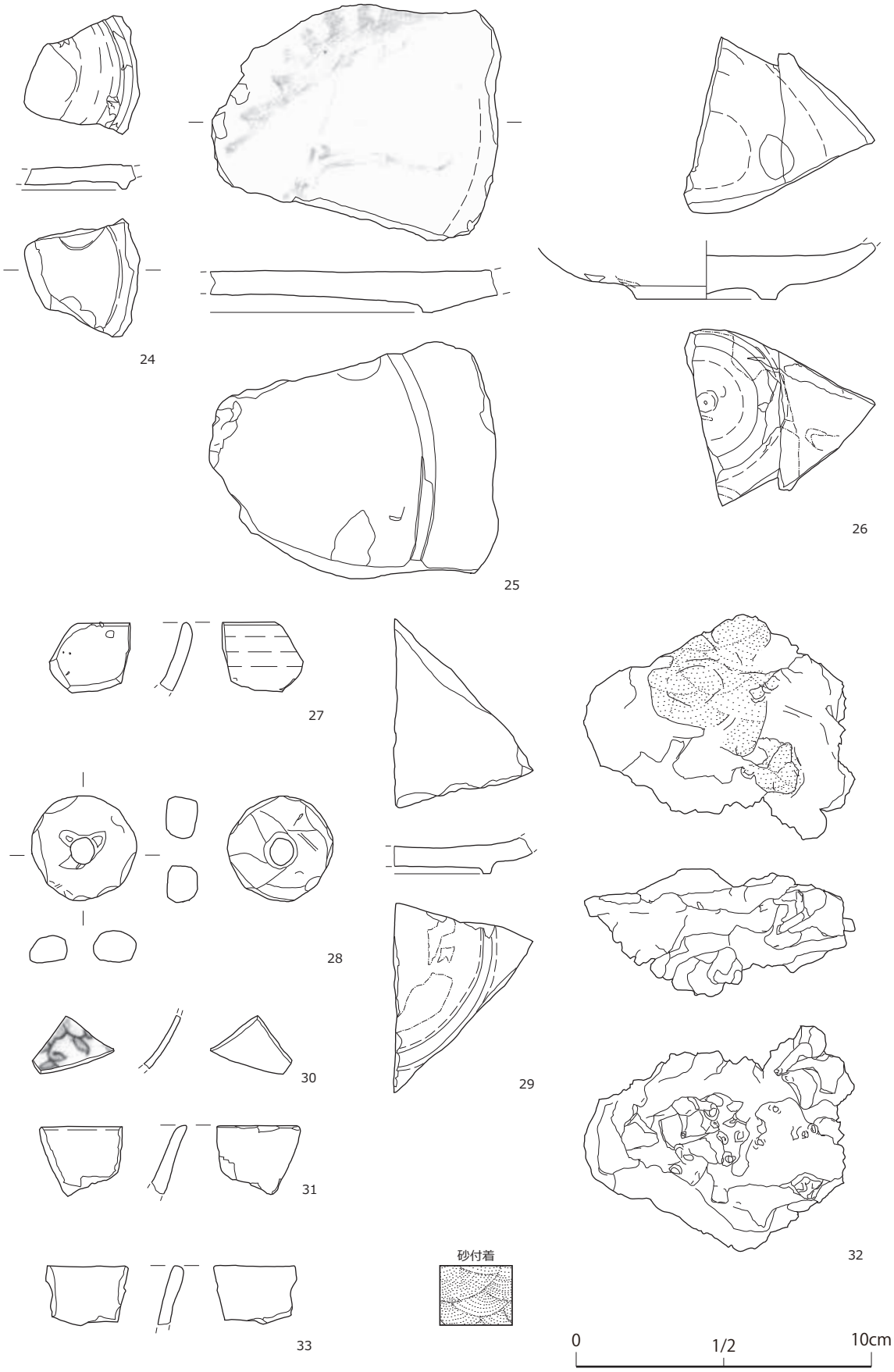


図２４　ＴＰ出土遺物（２）

第４章　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

１．はじめに

秋田県能代市の檜山城跡から出土した炭化材６点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）。

２．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表３のとおりである。試料は、「本丸」HB１ のサブトレンチの最下層（47層）および北壁土層の20-21層から採取された炭化材（試料 No.1：PLD-44116、試料 No.3：PLD-44118）、HB２の炭化物範囲の34層から採取された炭化材（試料 No.2：PLD-44117）、HC３のSN06の７層から採取された炭化材（試料 No.4：PLD-44119）、HB４のSKI07の底面から採取された炭化材（試料 No.6：PLD-44121）、「二の丸」NB２のSKP065から採取された炭化材（試料 No.5：PLD-44120）の合計６点である。なお、炭化材には、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

表３　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44116	調査区：「本丸」 遺構：サブトレンチ トレンチ：HB1 層位：最下層（47層） 試料No.1	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44117	調査区：「本丸」 遺構：炭化物範囲 トレンチ：HB2 層位：34層 試料No.2	種類：炭化材（サクラ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44118	調査区：「本丸」 遺構：北壁土層 トレンチ：HB1 層位：20-21層 試料No.3	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44119	調査区：「本丸」 遺構：SN06 トレンチ：HC3 層位：7層 試料No.4	種類：炭化材（サクラ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44120	調査区：「二の丸」 遺構：SKP065 トレンチ：NB2 層位：覆土 試料No.5	種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44121	調査区：「本丸」 遺構：SKI07 トレンチ：HB4 層位：底面 試料No.6	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L,水酸化ナトリウム：1.0 mol/L,塩酸：1.2 mol/L）

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３．結果

表４に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、図25に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表４　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果試料および処理

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-44116 試料No.1	-27.01±0.22	344±20	345±20	1493-1524 cal AD (25.54%) 1561-1563 cal AD (1.31%) 1572-1603 cal AD (24.67%) 1608-1630 cal AD (16.76%)	1476-1529 cal AD (35.25%) 1540-1635 cal AD (60.20%)
PLD-44117 試料No.2	-28.38±0.26	357±20	355±20	1477-1520 cal AD (37.98%) 1588-1621 cal AD (30.29%)	1460-1465 cal AD (1.55%) 1467-1525 cal AD (44.48%) 1557-1632 cal AD (49.43%)
PLD-44118 試料No.3	-28.72±0.21	399±20	400±20	1450-1487 cal AD (68.27%)	1444-1506 cal AD (84.03%) 1594-1618 cal AD (11.42%)
PLD-44119 試料No.4	-25.21±0.21	397±19	395±20	1451-1487 cal AD (68.27%)	1446-1505 cal AD (83.72%) 1595-1617 cal AD (11.73%)
PLD-44120 試料No.5	-25.84±0.24	407±20	405±20	1449-1476 cal AD (68.27%)	1441-1501 cal AD (89.60%) 1600-1616 cal AD (5.85%)
PLD-44121 試料No.6	-27.07±0.21	353±19	355±20	1480-1521 cal AD (34.81%) 1580-1584 cal AD (2.71%) 1587-1622 cal AD (30.75%)	1461-1463 cal AD (0.39%) 1469-1527 cal AD (42.14%) 1553-1633 cal AD (52.92%)

４．考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。「本丸」HB１のサブトレンチの最下層（47層）から採取された試料 No.1（PLD-44116）は、1476-1529 cal AD（35.25%）および 1540-1635 cal AD（60.20%）の暦年代を示した。これは15世紀後半～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。また、同じHB１の北壁土層の20-21層の試料No.3（PLD-44118）は、1444-1506cal AD（84.03%）および 1594-1618 cal AD（11.42%）の暦年代を示した。これは15世紀中頃～16世紀初頭および16世紀末～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。

HB２の炭化物範囲の34層から採取された試料No.2（PLD-44117）は、1460-1465 cal AD（1.55%）、1467-1525 cal AD（44.48%）、1557-1632 cal AD（49.43%）の暦年代を示した。これは15世紀後半～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。

HC３のSN06の７層から採取された試料No.4（PLD-44119）は、1446-1505 cal AD（83.72%）および 1595-1617 cal AD（11.73%）の暦年代を示した。これは15世紀中頃～16世紀初頭および16世紀末～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。

HB４のSKI07の底面から採取された試料No.6（PLD-44121）は、1461-1463 cal AD（0.39%）、1469-1527cal AD（42.14%）、1553-1633 cal AD（52.92%）の暦年代を示した。これは15世紀後半～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。

「二の丸」NB２のSKP065から採取された試料No.５（PLD-44120）は、1441-1501 cal AD（89.60%）および1600-1616 cal AD（5.85%）の暦年代を示した。これは15世紀中頃～16世紀初頭および16世紀末～17世紀前半で、室町時代～江戸時代前期に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料６点は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

参考文献

ronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．
Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0-55 cal kBP）. Radiocarbon, 62（4）, 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41.
https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

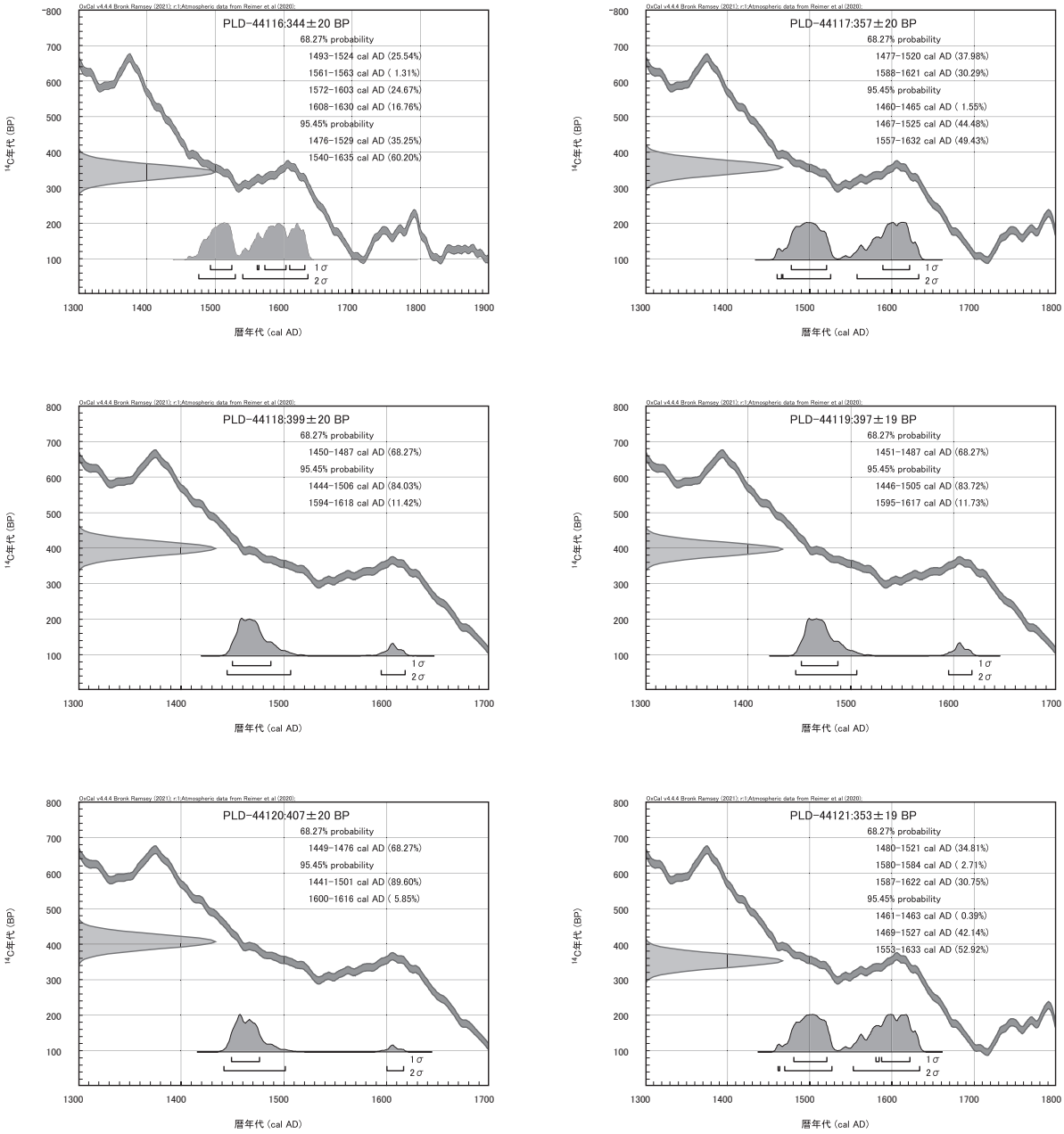

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:1;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44116:344±20 BP
68.27% probability
1493-1524 cal AD (25.54%)
1561-1563 cal AD (1.31%)
1572-1603 cal AD (24.67%)
1608-1630 cal AD (16.76%)
95.45% probability
1476-1529 cal AD (35.25%)
1540-1635 cal AD (60.20%)
PLD-44117:357±20 BP
68.27% probability
1477-1520 cal AD (37.98%)
1588-1621 cal AD (30.29%)
95.45% probability
1460-1465 cal AD (1.55%)
1467-1525 cal AD (44.48%)
1557-1632 cal AD (49.43%)
PLD-44118:399±20 BP
68.27% probability
1450-1487 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1444-1506 cal AD (84.03%)
1594-1618 cal AD (11.42%)
PLD-44119:397±19 BP
68.27% probability
1451-1487 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1446-1505 cal AD (83.72%)
1595-1617 cal AD (11.73%)
PLD-44120:407±20 BP
68.27% probability
1449-1476 cal AD (68.27%)
95.45% probability
1441-1501 cal AD (89.60%)
1600-1616 cal AD (5.85%)
PLD-44121:353±19 BP
68.27% probability
1480-1521 cal AD (34.81%)
1580-1584 cal AD (2.71%)
1587-1622 cal AD (30.75%)
95.45% probability
1461-1463 cal AD (0.39%)
1469-1527 cal AD (42.14%)
1553-1633 cal AD (52.92%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ

図２５　暦年較正結果

第5章 まとめ

１．出土遺物

檜山城跡の第６次調査では、中世から近世に属する貿易陶磁器、国産陶器やかわらけ、石製品、鉄製品、鉄滓などの遺物が出土した。そのほか近世・近代の陶磁器も出土している。中世から近世の接合後の土器・陶磁器の出土数は47点、近世・近代が７点で撹乱や後世の堆積とわかる層からの近代以降の遺物は含めていない。鉄製品は17点ほどで、鉄滓もわずかに認められる。遺構内出土や残存率の高い個体を中心に図化し載録した。なお、陶磁器の釉範囲は一点鎖線で表現した。

貿易陶磁器

調査では17点が出土した。内訳は中国産の染付14点、青磁１点、白磁２点となる。調査区別では、通称「本丸」で染付７点、白磁２点、ＴＰ１古寺地区で染付３点、青磁１点、ＴＰ３Ａ「本丸」下南曲輪西で染付３点、ＴＰ４Ａ「本丸」下西曲輪切岸で染付１点となる。通称「本丸」では遺物の出土が少なかった一方で、矮小なＴＰからの出土が相対的に多くみられた。

図化したのは11点である。遺構内からの出土は白磁１点（1）のみで第５次調査ＳＫＩＯ７を切るＳＫＯ１確認面で見つかった。染付は大部分が皿で、四方襷文が施されている個体（5）が含まれる。ＴＰ１古寺地区の染付は折縁の皿である（14）。青磁は蓮弁が線描になった碗（16）が出土した。被熱していると考えられる。主な時期は15世紀末から17世紀初頭に収まる。

国産陶器･土器

中世から近世初頭に属すると考えられる遺物が30点出土した。内訳は唐津15点、瀬戸美濃大窯４点、志野８点、かわらけ２点、坩堝１点となる。唐津は通称「本丸」、ＴＰ３Ａ、ＴＰ４Ａからの出土である。大窯はＴＰ１、ＴＰ３Ａ・Ｂからの出土で、ＴＰ１は天目茶碗体部（17）である。ＴＰ３Ａ・Ｂから出土した３点は大窯１期から４期までの間で捉えられる。志野まで含めると４期から登窯１期までの遺物が認められる。志野は５点が通称「本丸」、３点がそれぞれＴＰ３Ａ・Ｂ、４Ａからの出土である。ＴＰ３Ａのから出土した１点（25）は鼠色の発色を呈す鉄絵が施された直径20㎝以上の大きめの皿と想定される。通称「本丸」から出土したうちの細片１点（6）には漆の付着がみられる。

かわらけは通称「本丸」からの出土で京都系と考えられる。ＳＫＰ１２８柱穴様ピットから出土した底部（2）は内側にナデが施され、黒色処理されている。

また、18世紀以降と考えられる唐津が通称「本丸」、ＴＰ５枡形虎口の構築土の中から出土している。そのほか近世の染付１点がＴＰ３Ａから、近世～近代の鉢（18）がＴＰ１から出土した。

金属製品･石製品･鉄滓など

鉄製品は大部分が釘、棒状の形態を示す（13）。折れたものや曲がったものなどがみられる。大きさは長短があり、断面も長方形や方形に近いものもあるなど多様である。過年度調査で出土した様相と同様である。石製品はＴＰ３Ａから１点（28）が出土した。やや厚みのある円形で、中央に穿孔がみられ

る。細かな細工から留め具のような用途が想定される。鉄滓はＴＰ４Ａで碗形鍛冶滓１点（32）が出土した。通称「本丸」からは鉄生産に関わると思われる微細な遺物が数点確認された。

石碑（１９）

ＴＰ１古寺地区で、現在も水を湛える池の東縁付近から出土した。前後の面をやや平滑に加工し、頭部を平坦に削出している。頭部付近を前後面ともに頭部に向けて斜めに削り、横から見るとやや尖るような形状を呈す。頭部以外の周縁部は欠損していると考えられる。碑面は残存している部分のほぼ中央に梵字３文字が陰刻され、右側の別行に、中央の梵字３文字目よりやや下目に「天」の文字が陰刻されている。梵字はキャ・カ・ラとなり、五輪の空・風・火を示すため、欠損した下部には水・地を示すバ・アが続いていると思われる。「天」の下部も欠損しており、年号を示すものと考えられる。

表５　掲載遺物一覧

No.	挿図No.	図版No.	出土地点	層位他	器種	種別	部位	産地・分類
1	図13	8-1,2	SK01	確認面	白磁	皿	口縁-体部	端反　Ｅ群
2	図13	8-1,2	SKP128	5層	かわらけ	皿	底部	内面黒色処理
3	図13	8-1,2	HE1	RP13	染付	皿	体部	
4	図13	8-1,2	HE6B	RP41	染付	皿	口縁部	
5	図13	8-1,2	HE7	RP1	染付	皿	口縁部	Ｅ群　四方襷
6	図13	8-1,2	HE7	RP49	志野	丸皿	口縁部	鉄漆付着
7	図13	8-1,2	HE7	RP50	唐津	皿	口縁部	
8	図13	8-1,2	HE5	RP2	唐津	皿	底部	
9	図13	8-1,2	HE7	北壁3層	唐津	皿	底部	
10	図13	8-1,2	HE1	RP8	唐津	鉢か壺	口縁部	18c以降
11	図13	8-1,2	HE9	RP56	唐津	壺	口縁部	18c以降
12	図13	8-1,2	HE9	RP57	坩堝			
13	図13	8-1,2	HE6C	9層	鉄製品	棒状		5mm角･欠損
14	図23	9-1,2	TP1	RP12	染付	皿	体部	折縁　Ｂ2群
15	図23	9-1,2	TP1	RP1	染付	皿	口縁部	折縁　Ｂ2群
16	図23	9-1,2	TP1	RP3	青磁	碗	体部	
17	図23	9-1,2	TP1	RP14	大窯	天目	体部	
18	図23	9-1,2	TP1	RP18	陶器	鉢	口縁部	
19	図23	巻頭カラー2	TP1	1～3層	石造物	石碑	上部	板碑型
20	図23	9-1,2	TP3A	RP6	染付	皿	体部	Ｋ群
21	図23	9-1,2	TP3A	RP7	染付	皿	体部	
22	図23	9-1,2	TP3A	RP10	染付	皿	底部	
23	図23	9-1,2	TP3A	RP1	大窯	反り皿	口縁部	大窯1期
24	図24	10-1,2	TP3A	RP3	大窯	内禿皿	底部	鉄釉　大窯3-4期
25	図24	10-1,2	TP3A	RP4	志野	皿	底部	鉄絵　大窯4期
26	図24	10-1,2	TP3A	2層	唐津	砂目皿	底部	灰釉
27	図24	10-1,2	TP3A	1-2層	唐津	砂目皿	口縁部	灰釉
28	図24	10-1,2	TP3A	RQ11	石製品	留め具か		穿孔
29	図24	10-1,2	TP3B	6a層	志野	皿	底部	登1
30	図24	10-1,2	TP4A	RP2	染付	皿	体部	
31	図24	10-1,2	TP4A	RP5	唐津	碗	口縁部	
32	図24	10-1,2	TP4A	2層	碗形鍛冶滓			
33	図24	10-1,2	TP5	7層	唐津	甕か壺	口縁部	18c以降

小　結

第６次調査では、通称「本丸」では、公園造成による削平で中世の堆積土が失われている部分が多くみられた。特に園路部分は削平が顕著で、公園の植え込み等のため島状に残された部分も撹乱されている箇所が見られた。一方で島状部分になったことで削平を免れた遺構も見られる。調査区西側では昨年度調査同様盛土による曲輪造成の痕跡が確認された。

残っていた堆積土からは唐津が出土しており、16世紀末から17世紀初頭以降の堆積が確認できる。それ以前の層はほぼ失われていた。削平されていることもあり、生活面というよりは遺構確認面が漸移層あるいは地山中となる。切合いは多くみられるため、複数時期の曲輪の使用が想定される。

遺物が出土した遺構は少なく、ＳＫＯ１、ＳＫＰ１２８、その他柱穴様ピットから鉄製品が出土している。

ＳＫＯ１土坑からは15世紀末と考えられる白磁がみつかっているが、昨年度調査でＳＫＩＯ７竪穴状遺構からは16世紀の遺物がみつかっており、ＳＫＯ１はＳＫＩＯ７を切っていることから、16世紀以降の遺構と考えられ、当該時期に曲輪が何らかの使用をされていたと考えられる。同様に竪穴状遺構は、いくつかの遺構により切られていることから、少なくとも２時期が想定される。ＳＫＩＯ７周辺東側には炭化物を含む範囲が確認されており、ＳＫＩの一部と考えているが、これが別の遺構であれば、ＳＫＩに切られていることから少なくとも３時期が想定される。

ＳＫＰ１２８柱穴様ピットからはかわらけが出土しており16世紀以降の遺構と考えられる。今年度調査では掘立柱建物跡の可能性のある柱の並びが複数棟分確認されており、当該遺構もその一部を構成すると考えられることから、16世紀以降に何らかの建物が建築されていたと考えられる。

時期的には15世紀末から17世紀初頭の遺物が見られ、掘立柱建物や竪穴状建物などの遺構からは16世紀以降の使用が考えられる。かわらけの存在から儀礼を行う空間も想定できる。昨年度までの調査でも、複数の生活面が確認されており、短い期間と想定しているが遺構の切合いから建て替えがあったことも確実である。これまでの調査で日常・儀礼的な空間があったと考えられ、今年度調査も同様な様相が見られた。また、坩堝の出土は、鍛冶のみでなく多様な工房域の存在を示唆するものと捉えられる。来年度以降の調査で遺物の分布域やの傾向を明らかにすることが目的の一つとなると考える。

古寺地区では16世紀代の日常的な陶磁器が出土した。近代に入る可能性もある鉢など、断続的な長い期間の使用が想定される。古寺の池は造成年代が明らかでないが、平場自体は16世紀には存在したと考えられる。出土した石碑は、板碑型だが、檜山安東氏領には板碑は少なく、整形板碑の頭部は三角形を呈し形態が異なる。また、その他の板碑には自然石のものが多い。全て檜山安東氏以前に造られたと考えられる。江戸時代に入ると板碑型の墓石が見られるが、唐破風屋根を有するなど出土石碑とは形態が異なる（小山2021）。碑面も五輪を表すものは周辺に類例がなく、持ち込まれた可能性も残る。福井県坂ノ下中世墓群で出土した笏谷石製の石碑に五輪を示す梵字が陰刻された例があり「天文十六年」の紀年銘を持つ。形態は頭部が山形であるなど相違も見える。

檜山安東氏（下国愛季）と笏谷石を産出する越前の朝倉氏との交流は、天文年間には知られていない（能代市1998）。一方でそのころには家臣関戸氏を安東氏縁の羽賀寺の所在する小浜に置くなど、日本海交易はすでに行われている。朝倉氏との親交の中で檜山に渡ったものと考えると、文献から見れば永禄年中以降となり天文までは遡らない。朝倉氏は天正元年には織田信長に滅ぼされ、笏谷石の流通はそれ

までの朝倉氏との関係において広がりをみせていた分布から、各地に広がるようになる（赤澤2021）。愛季と織田信長との関係は天正３年から見え始めることから、それ以降の流入であると考えれば「天正」の年号である可能性が高い。いずれにしても秋田県内では最も古い時期にあたる笏谷石製品となるため、時期の同定には慎重を要する。

なお、古寺地区は現在の地元呼称を地区名としたものであり、明確な古寺跡ではない。安東氏時代の寺を示すという確証もないが、少なくとも今回の石碑の出土により、宗教的な意味を持つ空間であったことが明らかになったと言える。

古城地区の南西部に位置する調査区では、切岸から遺物が出土し、おそらくは上の曲輪からの流れ込みと考えられる。日常的な器のほかに碗形鍛冶滓が含まれていることから、古城地区西尾根曲輪では、鉄生産に関わる機能があったと考えられる。古城地区南曲輪からは染付皿や志野皿、唐津など17世紀初頭までの遺物がみつかっており、安東氏時代から、それ以降の使用が認められる。通称「本丸」とほぼ隣接する位置関係ではあるが比高差は13m以上あり、曲輪の現在の状態としてはほぼ平らであるが水はけがよくない。東側が高くなっており、そちらからも水が流れ込んでいると思われる。城として使用された当時の水の管理は不明であるが、遺物の出土状況からは周辺の居住空間が想定される。調査区には粘土範囲が広がるなど、水の動きによる堆積が見られた。今回の調査区で地山と考えた堆積は、人為的な改変も否定できないが崩落堆積した自然堆積の可能性が高いと思われる。

枡形虎口からは北側土塁の版築状の堆積土から近世の唐津が出土した。やや歪な土塁の形状であるため城破りの痕跡も想定していたが、堆積状況から近世に入ってからも土塁として使用されていたと考えられる。

２．全体の成果と課題

第６次調査では昨年度トレンチ調査で遺構の分布密度の濃いことが判明した通称「本丸」中央西側に調査区を設定し、遺構の広がり、建物の有無と規模、堆積の様相を確認することを目的に設定した。通称「本丸」調査の３年目であり必要に応じて調査区を広げた。また、これまでの調査で虎口の可能性の高い曲輪東側括れ部分にトレンチを入れる予定であったが、建物跡の確認を優先した。

平場では公園造成により中世の堆積が失われている箇所が多く層位の確認では思うような成果は得られていない。しかしながら遺構の切合いから時期差を検討していく必要がある。遺構は昨年度検出された竪穴状遺構が想定した以上に広がることが確認された。同様に昨年度検出した炭範囲の広がり（ＳＮＯ６）も、炭が充填された中心部が明らかになるなど、トレンチ調査ではわからなかった知見が得られた。調査では柱穴様ピットが多数検出され、建物跡になる可能性のある柱の並びが複数検出された。建物規模全体を明らかにするには至らなかったものの、存在していた可能性を示すことができた。建物跡の全容を明らかにすることが来年度以降の課題である。また、虎口についても発掘調査によって明らかにする必要がある。

竪穴状遺構については、全体がまだ判明しないものの、伏屋式の竪穴建物の可能性がある。一方で虎口が東側と想定され、同時期と考えると、位置的に不自然な様相となるため、曲輪全体の機能を考える中での検討が必要となる。伏屋以外の可能性として、関西の城跡に見られる虎口付近に配置される石枡と呼ば

れる石組みの掘り込み状の遺構がある。虎口との関連があるとすれば検討の対象になる。また、用途不明の竪穴状遺構としては青森県東通村目名高館跡で検出された例がある。

第６次調査で、第１期６年計画の最終年となる。古城地区の主要な曲輪の一つである通称「三の丸」から調査を始め、進入路と曲輪の性格を確かめるために計画を見直しつつ調査を進めてきた。トレンチ調査では大きな建物が見つからなかったことから、４次調査以降は通称「本丸」「二の丸」に調査対象区を移して調査を行った。同時に２、３次調査では進入路把握のために通称「三の丸」下沢に調査区を設定した。また、城内の動線の確認のため２次調査では通称「本丸」南下、３次調査では枡形虎口において調査を行っている。城内道は枡形虎口から通称「本丸」南下を通るルートが確実となっている。古城地区への進入する動線の一つとして把握できた。しかし主要な曲輪への進入路はまだ見つかっておらず、今後の調査が必要である。今年度通称「本丸」３年目で建物跡の可能性のある柱穴が見つかっている。調査計画を見直し、通称「本丸」を主要な曲輪と再確認し、調査範囲を広げ、規模を確認することが第２期の目的の一つになると考えている。第２期は通称「本丸」の建物の有無・規模、進入路の様相を明らかにすることを目的に、第１期の課題を解決しながら行っていくことを目指す。

通称「本丸」の年代については、調査区内から採取した炭化物の放射性炭素分析による年代と、層位を合わせて考えると、堆積は元和の城破り前の時期に納まる。反対に古くは安東氏が檜山城を築いたとされる15世紀末よりも遡る可能性がある。炭化物の樹種はコナラ属、サクラ属、ツバキ属であった。コナラ属は燃料としての炭の可能性が考えられる。炭化物の広がりとして確認された２カ所についてはサクラ属であり、炭化物の集まっている原因と理由については今後の検討が必要である。ツバキ属は第５次調査ＳＫＩＯ７竪穴状遺構底面近くから採取した炭化物で曲輪内の植栽に関わるものであろうか。なお、通称「二の丸」ＳＫＰＯ６５柱穴様ピットからの試料はスギで建築材の可能性がある。

また、分析報告書は掲載していないが、古寺北調査区から採取した木材はカツラであった。ＳＸＯ４からはコナラ属コナラ節が検出されている。

【参考文献】

愛知県 2007『愛知県史 別編 窯業２ 中世・近世 瀬戸系』
赤澤徳明 2021「笏谷石を中心とした越前・若狭の石造物文化」（日本考古学協会発表レジュメ）
男鹿市教育委員会 2013『国指定史跡脇本城跡―総括報告書―』
小山美紀 2021「秋田県の笏谷石製品―分布と傾向―」『秋田考古学』第 64･65 合併号
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2005『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
東北中世考古学会編 2003『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
日本貿易陶磁研究会 1998『貿易陶磁研究』No.1-5 六一書房
能代市 1998『能代市史 資料編 古代・中世一』
能代市教育委員会 2004『檜山城と檜山城跡』
萩原三雄・中井均編 2016『中世城館の考古学』高志書院
東通村 1999『東通村史―遺跡発掘調査報告書編―』（目名高館跡）
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『坂ノ下遺跡群』一般国道８号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第１集
藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』

図版1

1　調査区全景（北→）

2　調査区全景（西→）

１　ＨＥ５・１０竪穴状遺構（東→）

２　ＨＥ１０終了状況（北東→）

３　ＨＥ１南壁土層（北→）

４　ＨＥ６Ｃ南壁土層（北→）

５　ＨＥ６Ｃ北壁土層（南→）

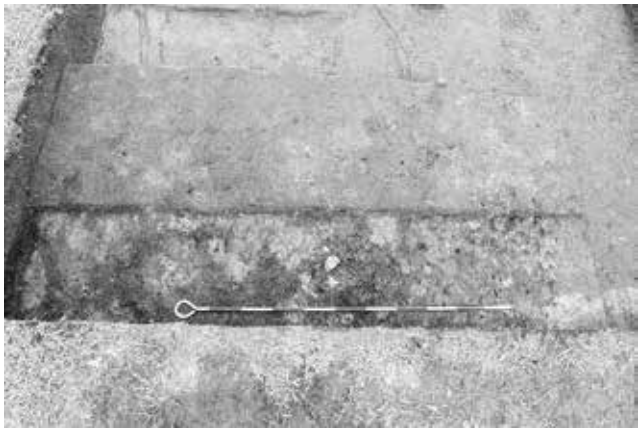
６　ＨＥ６Ｃ鉄製品出土状況（南→）

７　ＨＥ７土層（北西→）

８　ＳＫＯ１土坑検出状況（東→）

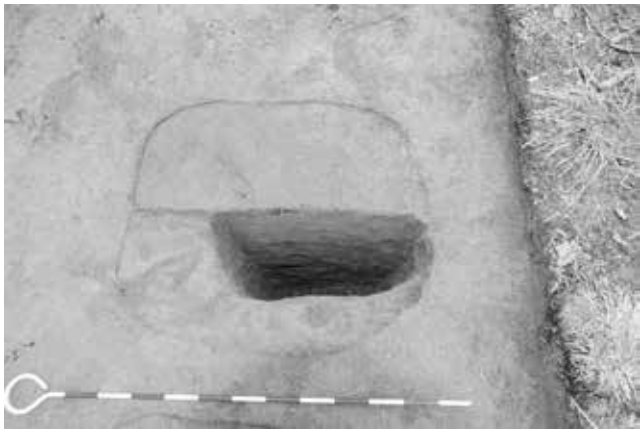
図版3

1　ＳＮＯ３焼土遺構土層（北→）

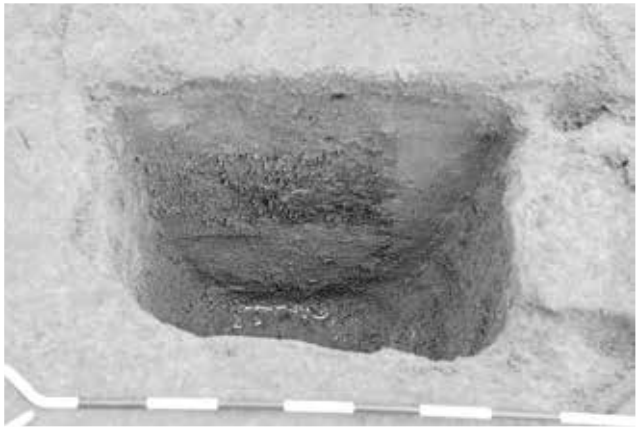


2　ＳＸＯ４性格不明遺構検出状況（北→）

3　ＨＥ１０・ＳＸＯ４土層（南西→）



4　ＳＫＰＯＯ２柱穴様ピット土層（南→）



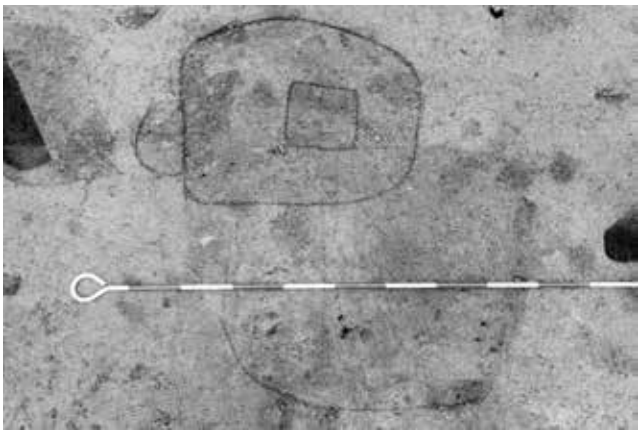
5　ＳＫＰＯＯ９柱穴様ピット土層（南→）

6　ＳＫＰＯ５９柱穴様ピット土層（西→）

7　ＳＫＰ１２５柱穴様ピット土層（西→）

8　ＳＫＰ１２５灰色粘質土検出状況（西→）

1　ＳＫＰ１２８遺物出土状況（東→）



2　ＳＫＰ０４２・０４３・１６１検出状況（南 →）

3　ＴＰ１古寺北調査区（西→）

4　ＴＰ１古寺北調査区サブトレ土層（南→）

5　ＴＰ１古寺南調査区（北東→）

6　ＴＰ２「三の丸」北東曲輪（東→）

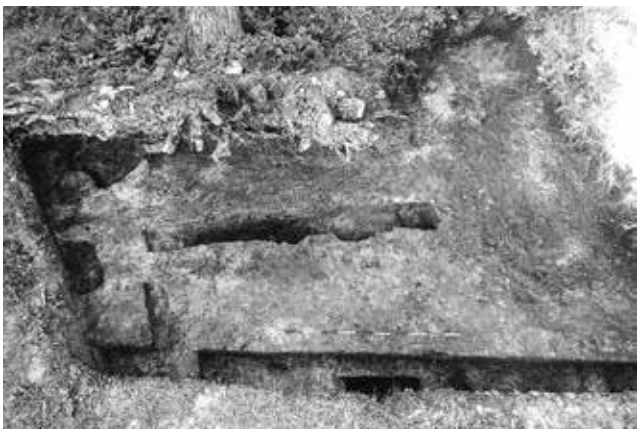
7　ＴＰ３Ａ古城地区南曲輪西（南→）

8　ＴＰ３Ａ ＡＡ’ 土層（北西→）

図版5

1　ＴＰ３Ａサブトレンチ土層（南→）

2　ＴＰ３Ａ遺物出土状況（東→）



3　ＴＰ３Ｂ調査終了状況（南→）

4　ＴＰ３Ｂ ＡＡ’土層（北西→）

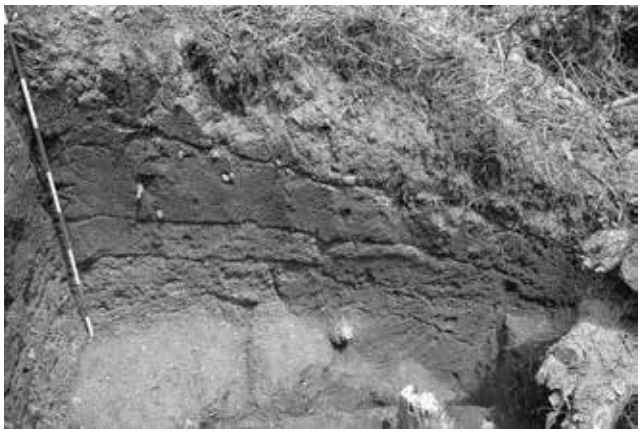
5　ＴＰ３Ｂサブトレンチ土層（南→）

6　ＴＰ３Ｂ深掘り状況（北→）

7　ＴＰ４Ａ古城地区南西曲輪ＡＡ’土層（南東 →）

8　ＴＰ４Ａ ＢＢ’土層（南西→）

１　ＴＰ４Ｂ調査終了状況（南西→）


２　ＴＰ４Ｂ土層（南西→）

３　ＴＰ５枡形虎口（南東→）

４　ＴＰ５ＡＡ’土層（南東→）

５　ＴＰ５ＢＢ’土層（東→）

６　ＴＰ５遺物出土状況（南東→）

７　ＴＰ６将軍山地区南西堀切道（北→）

８　ＴＰ６土層（東→）

図版7

1　ＴＰ７将軍山曲輪北（南西→）

2　ＴＰ８館神堂東曲輪縁（西→）

3　ＴＰ８土層（南西→）

4　ＴＰ９将軍山南西曲輪（南西→）

5　ＴＰ９土層（北西→）

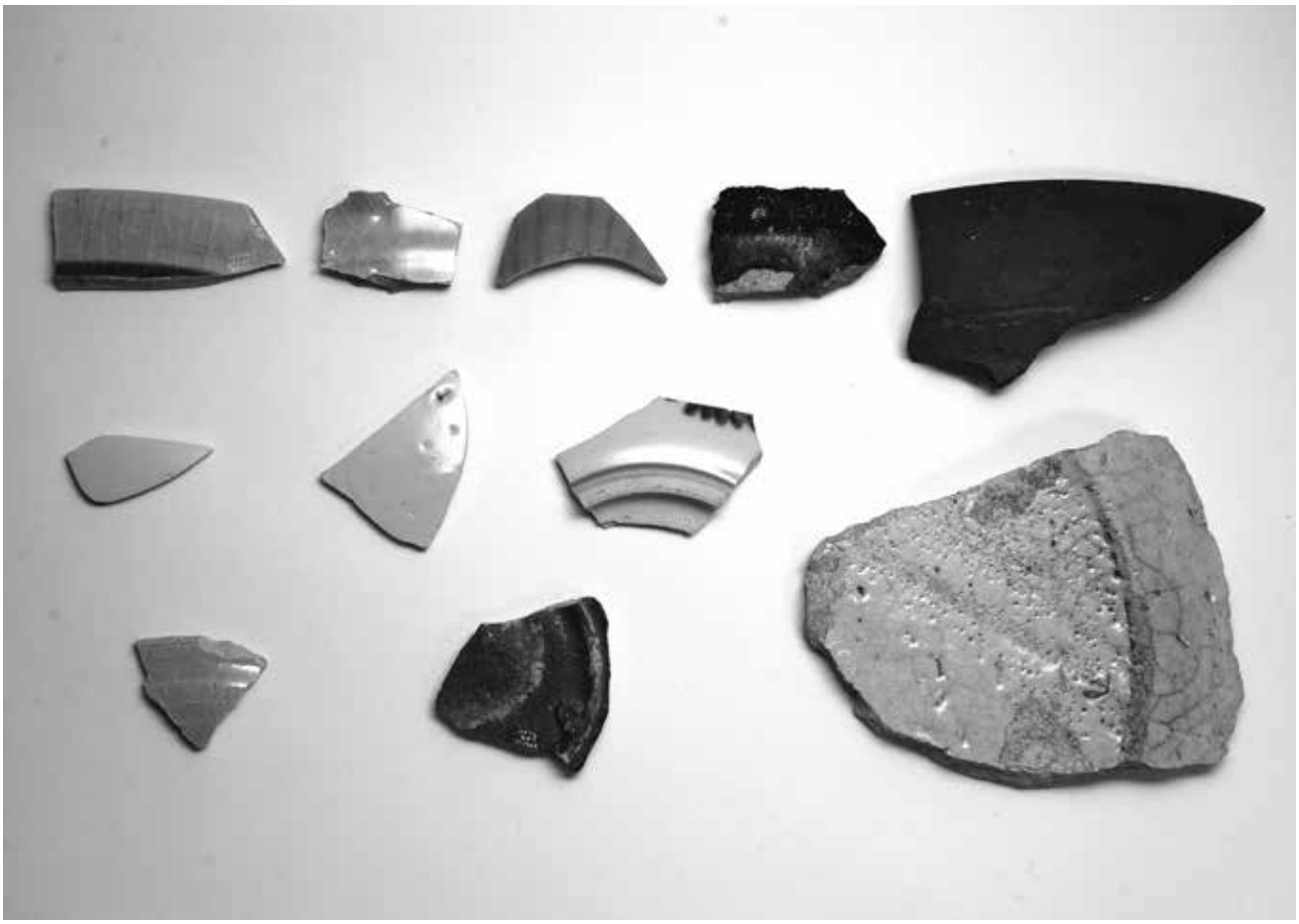
6　ＴＰ１０大堀切（北東→）

7　ＴＰ１０ＡＡ’土層（南東→）

8　ＴＰ１０ＢＢ’土層（南西→）

1　通称「本丸」調査区出土遺物（外側）

2　通称「本丸」調査区出土遺物（内側）



1　ＴＰ出土遺物①(外側)

2　ＴＰ出土遺物①(内側)

1　ＴＰ出土遺物②(外側)

2　ＴＰ出土遺物②(内側)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くにしせきひやまあんどうしじょうかんあとひやまじょうあとろく
書　　名	国史跡檜山安東氏城館跡　檜山城跡Ⅵ
副 書 名	令和３年度第６次発掘調査報告書
編 著 者 名	播摩芳紀・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
編 集 機 関	能代市教育委員会
所　在　地	〒018-3192　秋田県能代市二ツ井町字上台１番地１　TEL 0185-74-6040
発行年月日	西暦２０２２年３月３１日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
檜山城跡（ひやまじょうあと）	秋田県能代市檜山字古城地内（あきたけんのしろし ひやまあざふるしろ ちない）	05202	202-2 -109	40° 9′ 45″	140° 7′ 21″	20210513 ～ 20211008	１１８	檜山城跡環境整備に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
檜山城跡	城館跡	中世 ～近世	土坑 溝状遺構 焼土遺構 柱穴様ピット 性格不明遺構	磁器 陶器 土器 石碑 石製品 鉄製品 鉄滓	

能代市文化財調査報告書

（第１集）泥ノ木遺跡―携帯電話用無線基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　2009　株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ　能代市教育委員会

（第２集）下大野Ⅰ・Ⅱ遺跡―宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2011　有限会社コスモ　能代市教育委員会

第３集　梯ノ台遺跡―東北電力株式会社能代変電所増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　2014（簡易製本）

第４集　下田平遺跡―下田平地区農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2015

第５集　平影野遺跡―向能代地区整備事業（市道建設）に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2016

第６集　檜山城跡Ⅰ―平成 28 年度第１次発掘調査報告書―　2017

第７集　平影野遺跡Ⅱ－個人用住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2017（簡易製本）

第８集　檜山城跡Ⅱ―平成 29 年度第２次発掘調査報告書―　2018

第９集　大沢Ⅰ・Ⅱ遺跡―下田平地区農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―　2018

第 10 集　檜山城跡Ⅲ―平成 30 年度第３次発掘調査報告書―　2019

第 11 集　檜山城跡Ⅳ―令和元年度第４次発掘調査報告書―　2020

第 12 集　市内遺跡試掘・確認調査報告書　2020

第 13 集　檜山城跡Ⅴ―令和２年度第５次発掘調査報告書―　2021

第 14 集　檜山城跡Ⅵ―令和３年度第６次発掘調査報告書―　2022

第 15 集　サシトリ台遺跡―（仮称）能代山本広域風力発電事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2022

第 16 集　赤ハゲⅠ遺跡―河戸川・浅内地区農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―　2022

能代市文化財調査報告書第１４集

国史跡檜山安東氏城館跡

檜　山　城　跡　Ⅵ

－令和３年度第６次発掘調査報告書－

印刷・発行　令和４年３月

編集・発行　能代市教育委員会

〒０１８－３１９２

秋田県能代市二ツ井町字上台１番地１

ＴＥＬ　０１８５－７４－６０４０

ＦＡＸ　０１８５－７３－６４５９

製本・印刷　株式会社　大潟印刷